

教会とは

「教会」について、聖書は「公同の教会」と「地域の教会」が存在することを教えています。その違いをまず、はっきりと知ることが大切です。

I. 「見えない教会（公同教会）」

A. 「見えない教会」

神によって罪から救い出された者たちの集まりを「見えない教会」と呼びます。これは、この世界に数多く点在する教会という建物のことではありません。世界にただ一つだけ存在する「目に見えない教会」です。ここには人種や民族の区別、また、国境などはありません。ただ、聖霊のバプテスマ¹を受けて、「キリストのからだ」に加えられた真のクリスチャンだけが属する教会です。

また、聖書はこの教会のことを「神の人々、聖なる国民、聖徒」（ローマ8：33、Iコリント1：2、コロサイ3：12、Iペテロ1：2、2：9－10）、「神の宮、聖霊の宮、神殿、聖なる宮」（Iコリント3：16－17、6：19、IIコリント6：16、エペソ2：21）、「聖なる、王である祭司」（Iペテロ2：5、9）、「花嫁、小羊の花嫁」（IIコリント11：2、黙示19：7－9）などと呼んでいます。

B. 「その責任」

「キリストのからだ」と呼ばれるこの公同の教会のかしらはキリストであり、すべてのクリスチャンは例外なくそのからだの器官です。そのため、器官であるすべての信者には①かしらなるキリストの命令に服従する責任、②器官としての働きを精一杯行うという責任、③お互いの中に一致を保つという責任があります（使徒12：1、ローマ12：4－5、Iコリント10：32、12：12－23、28、15：9、ガラテヤ1：13、エペソ1：22－23、4：15－16、25、コロサイ1：18、2：1－13、16－21、3：4）。

II. 「見える教会（地域教会）」

A. 「見える教会」とは

この地上にある、キリストを唯一真の神、救い主として信じていると告白する人々の集まりです。そのため、自分はクリスチャンだと告白はしていても、実際は救いに与っていない人も集まっている可能性があります。また、地域の教会には聖書解釈の違いなどから生まれた多くの教派が存在します。

見えない教会と、見える教会には確かに相違が存在していますが、どちらも「神の栄光を現わす」という至高の目的においては一致しています。

¹ 聖霊のバプテスマとは、人が神を信じることによって救われたときただ一度起こるもので、これによって、聖霊がクリスチャンのうちに内住し、キリストのからだにつながるものとされる。これは聖霊の満たしとは異なるものである（参照 Iコリント12：12－13）

B. 「その責任」

私たちは、神の偉大さ、そのすばらしさをこの世に知らしめるという大きな責任があります。そのために、私たちはこの神を正しく崇め、そのみことばに服従して生きることが不可欠です。また、①みことばを学び、そして、語ること、②弟子を作ること（伝道し、訓練する）、③神を常に礼拝すること、④祈りをささげること、⑤助けいたわり合うこと、⑥神に喜ばれる家庭を築くこと、⑦各自に託されたもの（富など）を神のために用いること、⑧互いの徳を高め合う交わりを持つこと、などが必要です。

浜寺聖書教会の歴史

1945年9月に、マッカーサー元帥の占領軍とともに、従軍牧師として、当教会の創立者であるジョージ・エストライク宣教師は来日されました。アメリカでの休暇を終え、再来日された1946年9月に、大阪府信太山にある軍礼拝堂へ転属となり、浜寺公園にあった軍の礼拝を任されることになりました。そのとき、軍の将校たちの家で働く日本人たちがチャペルの礼拝に出席するようになり、彼らの中からバプテスマを受ける者たちが起こされ、後に、浜寺聖書教会を作る核となりました。

1947年4月、エストライク先生の浜寺での働きを聞かれたエステル・バーワ宣教師（当時、美濃ミッションの宣教師として三重県四日市市に住んでおられた）は、同年秋、本山ジュリア、佐伯茂子各先生方とともに、浜寺での宣教活動を始められ、昭和町1丁63に福音交友会本部を設置し、当教会の設立準備がなされました。

1949年、浜寺公園内米軍チャプレンとして働かれたジョージ・エストライク先生が、宣教師として再来日されました。そして、同年10月9日に福音交友会浜寺聖書教会として、当教会が設立されました。1950年5月14日、現在地（浜寺昭和町4丁462）に教会の建物が与えられました。1957年2月17日、福音交友会より独立し、自主教会として歩み始めました。

当教会は設立当初から、エストライク先生とともに農村伝道など、開拓伝道に熱心でした。教会の働きは時期を追って拡張し、堺市堀上緑町に初めての伝道所、緑町聖書教会（現、津久野キリスト恵み教会）を誕生させ、1965年12月26日に最初の礼拝がもたれました。そして、1984年4月1日には、第二番目の伝道所である泉佐野バイブル・チャーチ（後に泉佐野聖書教会）での礼拝を始めました。その後、2011年に浜寺聖書教会に統合されました。1989年1月8日には、奈良県葛城市に開設した奈良伝道所で礼拝を開始し、1994年6月には、大阪の北部にある千里桃山台で、月一回の礼拝を始めました。

浜寺聖書教会の信仰告白

I. 「聖書」

私たちは、聖書は神の啓示²の具現であり、靈感³によって与えられた神のことばであると信じる。聖霊なる神が、約40名の人々を用いて、個々の特徴を生かしながら神の啓示を書き記させたのである。そのため、聖書を構成する66の本（旧約39、新約27）はすべて、その原本において、そのすべての部分が平等に（十全靈感）、また、そのすべてのことばが靈感を受けた（逐語靈感）誤りの全くない神のことばであると信じる（マタイ5：18、24：35、マルコ12：36、使徒1：16、17：2-3、18：28、28：23、Iコリント2：10-14、Iテサロニケ2：13、IIテモテ3：16、ヘブル4：12、IIペテロ1：20-21）。

私たちは、聖書の中心主題が主イエス・キリストであり、彼こそが唯一真の神であり、救い主であることを信じる（ルカ24：27、44、ヨハネ5：39、使徒26：22-23）。

私たちは、聖書だけが信仰と生活における絶対の規範として、神から人に与えられた唯一のメッセージであるため、これをその通り信じ受け入れ、また、これに服従する（すなわち、愛し、学び、伝え、実践する）という責任が人にあることを信じる（ヨハネ17：17、ローマ15：4、Iコリント10：11、IIテモテ3：15-17）。

私たちは、聖書を正しく解釈する方法は、聖霊なる神の導きのもと、字義的（文字通り）・歴史的（著者の時代・環境・状況）・文法的原則に基づくものであることを信じる（ヨハネ7：17、16：13-15、Iコリント2：7-15）。

II. 「神」

私たちは、万物すべてを創造され、それを完全な知恵と力で治めておられる唯一の神を信じる（創世記1：1、申命記6：4、イザヤ45：5-7、使徒17：24-26、Iコリント8：4、エペソ3：9）。

私たちは、神は永遠に、父、子、聖霊の三位において存在しておられるが（マタイ28：19、IIコリント13：14）、しかし、それぞれは本質において同一であり、すべての被造物により崇拝を受けるに値する唯一のお方であると信じる（ヘブル1：1-3、黙示録1：4-6）。

A. 「父なる神」

私たちは、三位一体の第一位格である父なる神は、ご自分の目的と恵みによって、すべてのことを命じ、行なわれると信じる（詩篇145：8-9、Iコリント8：6）。このお方は、すべてものの創造主である（創世記1：1-31、エペソ3：9）。また、宇宙における唯一、完全で全能なる支配者として、彼は創造、摂理、そして、贖いにおける主権者である（詩篇103：19、ローマ11：36）。この「父」という呼称にはこのお方と人類との関係が含まれる。創造主としてこのお方は、すべての人間にとっても父であるが（エペソ4：6）、

² 「啓示」—神がある真理を人に示されること。神が示してくださらなければ決して知ることがない真理を示される神の行為。

³ 「靈感」—その真理を人が記録すること。このことばは「神が息をされた」、「吹き出された」という意味で、人ではなく、実は、神が聖書の本当の著者であることを教える。

特に、クリスチャンにとっては霊的な父である（ローマ8：14、Ⅱコリント6：18）。このお方は起こるすべてのことをご自身の栄光のために定められ（エペソ1：11-14）、今も、すべての創造物を支え、導き、そして、支配しておられる（Ⅰ歴代29：11-12）。父なる神は、すべてのものの創造主だが、罪の創造者ではない（イザヤ6：6、ヨハネ8：38-47、ヤコブ1：13-14）。また、罪を是認しておられるわけでもなく、人間の罪を必ず公平にさばかれる（ヨハネ5：29、ローマ6：23、ヘブル9：27、Ⅰペテロ1：17）。このお方は、ご自身の一方的な恵みによってクリスチャンを永遠の昔から選ばれ（エペソ1：4-6）、イエス・キリストを信じるすべての者に罪の赦しを与えられる。また、信じるすべての者にご自身の愛する子となる特権をお与えになる（ヨハネ1：12）。

B. 「子なる神（イエス・キリスト）」

私たちは、主イエスは真の神であり、真の人であることを信じる（ヨハネ1：1、5：18、10：33、ピリピ2：5-8、コロサイ2：9）。真の人であったゆえに、このお方は私たちと同じ試みを経験されたが、罪を犯すことが一度もなかった（ヘブル4：15）。

主イエスが、聖霊により身ごもった処女マリヤから生まれられたのは、真の神がどのようなお方であるかを示すため、罪に汚れた人類を救うため、そして、神の御国を治めるためであった（イザヤ7：14、9：6、ルカ1：26-35、ヨハネ1：29、ピリピ2：9-11、ヘブル7：25-26、Ⅰペテロ1：18-19）。

罪のない聖いイエスが、私たちの罪の身代わりとして、十字架の上でそのいのちという尊い代価を支払ってくださったことにより、贖いのみわぎを成し遂げてくださった（ヨハネ10：15、ローマ3：24-25、5：8、Ⅰペテロ2：24）。

主イエスが備えられた贖いが完璧であるゆえに、そのみわぎを信じる罪人はだれでも、完全な、しかも、永遠の罪の赦しを得ることができる（ローマ3：25、5：8-9、Ⅱコリント5：14-15、Ⅰペテロ2：24、3：18）。

主イエスは、死後三日目に約束どおり、肉体をもってよみがえられた。主イエスの復活は、ご自身が真の神であること、また、私たち人間には死後に必ずよみがえりがあることを教える。また、この十字架で成し遂げられた贖いのみわぎを、父なる神が完全に満足なされたことを証明するものである（ヨハネ5：26-29、14：19、ローマ1：4、4：25、6：5-10、Ⅰコリント15：20、23）。

主イエスは、現在、天にあって、私たちすべてのクリスチャンのためにとりなしをし、将来、私たちを迎えるために再臨される（使徒1：9-11、Ⅰテサロニケ4：13-18、ヘブル7：25、Ⅰヨハネ2：1、黙示録20）。

すべてにおいて完璧に父なる神に服従されたイエスの生涯は、私たちへの完全なる模範である（ヨハネ13：15、Ⅰペテロ2：21）。

C. 「聖霊なる神」

私たちは、聖霊は人格をもち、神としてのあらゆる属性を兼ね備えたお方であると信じる。それらは、知恵（Ⅰコリント2：10-13）、感情（エペソ4：30）、意志（Ⅰコリント12：11）、永遠性（ヘブル9：14）、遍在（詩篇139：7-10）、全知（Ⅰサムエル40：13-14）、全能（ローマ15：13）、真理（ヨハネ16：13）である。これ

は、聖霊が父、子と同等の神であることを証明する（マタイ 12：4－6、Ⅱコリント 13：14、エレミヤ 31：31－34、ヘブル 10：15－17）。

聖霊は人との関係において、神のご意志を遂行なさる。また、天地創造（創世記 1：2）、キリストの受肉（マタイ 1：18）、救い（ヨハネ 3：5－7）、そして、神の啓示である聖書を書き記すこと（Ⅱペテロ 1：20－21）における聖霊の主権的行動を認める。

聖霊の教会時代における働きはペンテコステから始まった。このことは、主イエスの約束の成就であった（ヨハネ 14：16－17、15：26）。

聖霊が来られたのは、キリストのからだである教会を建て上げるため、また、それを完成させるためであった。そして、聖霊はすべての信者をバプテスマによってキリストのからだへと招き入れられる（Ⅰコリント 12：13）。そのために聖霊は人間に罪を、義を、そして、さばきを認めさせ、悔い改めを与え、救いへと導かれる（ヨハネ 16：7－9、13、使徒 11：18）。また、聖霊は信者のうちに内在し、聖め、教え、奉仕への力を与え、贖いの日⁴まで守られることの保証としての神の印である（ローマ 8：9、Ⅱコリント 3：6、エペソ 1：13）。

聖霊は主イエス・キリストの栄光を現し、クリスチャンをキリストに似た者へと変え続ける働きを為さる（ローマ 8：29、Ⅱコリント 3：18、エペソ 2：22）。すべてのクリスチャンの責任は、その聖霊に満たされ続けることである（エペソ 5：18）。

Ⅲ. 「人間」

私たちは、人間は神に似た者として神によって創造されたと信じる。つまり、神は人間を理性、知性、意志、自力決定、神に対する道徳的責任を持つ者、そしてまた、罪のない者として創造されたのである（創世記 1：26－27、2：7）。

人間が創造された目的は、神の栄光を現すため、神との交わりを楽しむため、神のみこころに沿って生きるためであった（イザヤ 43：7、コロサイ 3：16、黙示録 4：11）。

神によって造られた最初の人間アダムが、自らの意志によって神の命令に逆らい、罪を犯し、その結果、霊的にも肉体的にも死ぬ者となった。すべての人は、このアダムにあって罪を犯したため、生まれながらに神に逆らう罪人であり、そのため神のさばきが約束されている（詩篇 14：1－3、エレミヤ 17：9、使徒 17：31、ローマ 2：21－23、32、3：9－18、23、5：10－12）。

Ⅳ. 「救い」

私たちは、人は例外なくすべて生まれながらに、永遠の滅び、罪のさばきへと向かっていることを信じる（エペソ 2：1－3）。また、いかなる善行、苦行、努力、儀式、宗教もその罪のさばきから人を救い出すには不十分である（ローマ 3：20、ガラテヤ 2：16）。ゆえに、救いとは、救いに関するいかなる希望も可能性もない私たち人間に対して、神が一方的に備えてくださった「恵みの賜物」である。神は、霊的に死んでいた私たち罪人の救いのために、救い主を与

⁴ 贖いの日とは、主イエスがすべてのクリスチャンを迎えてくださる空中再臨のときに、現在の罪のからだは栄光のものと変えられる日のこと。

えてくださり、その^{あがな}贖いのみわざを信じる者を例外なく救ってくださる。しかも、その信じる信仰さえも、神が与えてくださる賜物なのである。それゆえ、救いとはすべてが神の恵みのみわざであり、人間が自分の力や行いによっては絶対に得ることのできないものである。

*救われるにはどうすればよいか？ ⇒ 付録（１）参照

A. 「新生」

私たちは、新生は聖霊による超自然的な働きであり、それにより神のご性質といのちが与えられると信じる（ヨハネ 3：3-7、テトス 3：5）。新生は救われたその瞬間に起こることであり、これは聖霊なる神がみことばを用いて為されるわざである（ヨハネ 5：24）。聖霊により悔い改めへと導かれた罪人は、神によって備えられた救いを信仰によって受け入れる。真実の新生は良い行い、すなわち、正しい態度と振る舞いという悔い改めにふさわしい実によって明らかにされる（エペソ 2：8-10、5：17-21、ピリピ 2：12b、コロサイ 3：16、Ⅱペテロ 1：4-10）。新生した者がみことばに忠実に従い、聖霊に導かれて歩むときに、主イエス・キリストに似た者へと変えられ続ける（Ⅱコリント 3：18）。この変態は栄化によって完成する（ローマ 8：17、Ⅱペテロ 1：4、Ⅰヨハネ 3：2-3）。

B. 「義認」

義認とは、主イエスを信じる者、すなわち、自らの罪を悔い改め（イザヤ 55：6-7、ルカ 13：3、使徒 2：38、3：19、11：18、ローマ 2：4、Ⅱコリント 7：10）、主イエスを新たなる人生の主権者、主として告白する者（ローマ 10：9、10、Ⅰコリント 12：3、Ⅱコリント 4：5、ピリピ 2：11）を義と宣言される神の行為である。この義は、あらゆる徳、また、人の行いによっては得ることのできないものである（ローマ 3：20、4：6）。そして、義には、私たちの罪を主イエスに転嫁すること（コロサイ 2：14、Ⅰペテロ 2：24）、私たちへ主イエスの義・正しさが転嫁されることが含まれる（Ⅰコリント 1：30、Ⅱコリント 5：21）。これゆえに、神は主イエスを信じる者を義とされることが可能なのである（ローマ 3：26）。

C. 「聖化」

救われ、義と認められたすべての者を聖徒と呼ぶのは、彼らが神のために聖め分けられた者だからである。この「神のために聖め分ける」ことを「聖化」と呼ぶが、これには瞬間的に起こる立場的聖化と、漸進的聖化とがある。立場的聖化は、クリスチャンの「立場」と関係しているのであって、現在の歩み、状況とは異なるものである（使徒 20：32、Ⅰコリント 1：2、30、6：11、Ⅱテサロニケ 2：13、ヘブル 2：11、3：1、10：10、14、13：12、Ⅰペテロ 1：2）。

また、漸進的聖化とは、信者が義認により与えられた立場に、聖霊によって徐々に近づいていくというものである。それは、みことばへの服従と聖霊の助けによって、信者が聖さと神のみこころへの従順さにおいて成長し、主イエス・キリストに似た者へと変えられていく過程のことである（ヨハネ 17：17、19、ローマ 6：1-22、Ⅱコリント 3：18、Ⅰテサロニケ 4：

3-4、5：23）。

すべての救われた者は、キリストにある新しいいのちと古い罪との戦いを日々経験する。しかし、信者は内住する聖霊の力により勝利を得ることができるのである。この戦いは私たちが天に挙げられるまで続くものである（ガラテヤ5：16-25、エペソ4：22-24、ピリピ3：12、コロサイ3：9-10、Iペテロ1：14-16、Iヨハネ3：5-9）。

D. 「永遠の保証」

私たちは、神から救いを与えられた者はその救いを失うことなく、神の御手のうちに永遠に守られると信じる（ヨハネ5：24、6：37-50、10：27-30、ローマ5：9-10、8：1、31-39、Iコリント1：4-8、エペソ4：30、ヘブル7：25、13：5、Iペテロ1：5、ユダ24）。

私たちは、救いを失わないから、赦されるから、何をしても構わないと思うのではなく、却って、救われている者として罪深い肉的生活から離れることが責任であり、それが神に喜ばれる生き方であることを自覚して生きるのである（ローマ6：15-22、13：13-14、ガラテヤ5：13、25、26、テトス2：11-14）。

E. 「分離」

罪からの分離は旧・新約聖書を通じて命じられていることである。聖書は世の終わりには背教者や世的な者が増えることを示唆している（IIコリント6：14-7：1、IIテモテ3：1-5）。クリスチャンにとって、神が憎む罪から分離して生きることは、救いというこの上ない祝福を、犠牲をもって与えてくださった神への感謝の証として最もふさわしいものである。救われた者は、その神への愛、畏れを、あらゆる信仰的背教や世的な罪深い行いから分離するという行為によって、実際に表わすのである（ローマ12：1-2、Iコリント5：9-13、IIコリント6：14-7：1、Iヨハネ2：15-17、IIヨハネ9-11）。なぜなら、クリスチャンの特徴は義であり、聖い生活だからである。神の恵みによって救われたことを証明するものは、これまで愛して来た罪から離れ、神がお喜びになる聖さを求めて生きるという新しい生き方である（ローマ12：1、2、IIコリント7：1、ヘブル12：14、テトス2：11-14、Iヨハネ3：1-10）。

F. 「選 び」

私たちは、神がこの世界を創造される前から特定の人々をキリストによる救いへと導くように決めておられたことを信じる（エペソ1：4-11、IIテサロニケ2：13、Iペテロ1：2）。みことばはすべての人間には悔い改めて神の救いを受け入れるか、それとも、拒み続けるかという選択の責任があることを教える。一方、みことばは、救いは功績、善行という、人間の努力によって得られるのではなく、一方的な神の恵みによると教える。矛盾しているように思えるのは、知恵において不完全な私たち人間だけであって、神にとってはそうではない。

また、この選びは、神があらかじめだれが信じるのかを知った上で為されたものではない。これは、すべて神の主権に基づき、神によって決められたことであり、救われた者が神の栄光を現すことを目的として為された神の恵みの行為である（ヨハネ15：16、エペソ1：6）。

V. 「教会」

私たちは、教会は神の恵みによりこの世から召し出されたキリスト者の集まりであると信じる。そこにはユダヤ人も異邦人もなく、キリストを信じる信仰により救われたすべての者が、キリストのからだの一員となっているのである（ローマ3：22、12：4-5、Iコリント12：12-13、27、ガラテヤ3：28、エペソ1：23、2：11-18）。「キリストの花嫁」とも呼ばれる教会は（IIコリント11：2、エペソ5：23-32、黙示録19：7-8）、旧約の人々には及びもつかない「奥義」であった（エペソ3：5-6、5：32）。

私たちは、イスラエルとは完全に区別される教会は、ペンテコステに始まり、空中携挙により天に挙げられることを信じる（ローマ11：25、Iコリント15：51-52、Iテサロニケ4：13-18）。

教会の最高の権威はキリストである（Iコリント11：3、エペソ1：22、コロサイ1：18）。そのため、キリスト者はイエス・キリストに服従するという責任を負っている（エペソ5：23-24、コロサイ1：18、2：19）。それは、すなわち、聖書のみことばに従うことである。

私たちは、神が教会に与えた使命は、弟子作り、すなわち、福音宣教と、信者の教化であると信じる（マタイ28：19-20）。そのために、教会はみことばを学び、その教えに服従し、神を礼拝し、礼典（バプテスマ、聖餐式）を守り、伝道し、教化に励み、それぞれの霊的賜物を用いて、互いに仕え、励まし合い、そして、再臨を待ち望むのである。

教会組織において、会衆の上に立ち、彼らを治め、導くようにと神が定めた働き人は、長老たち（監督、牧師、教師）である（使徒20：28、エペソ4：11、Iテモテ5：17-22）。神は、彼らにみこころを示し、彼らを通してみこころを為されるのである。ゆえに、会衆は彼らのリーダーシップに積極的に従うのである（ヘブル13：17）。長老たちはみことばの教えによって会衆を養い育てるだけでなく、戒規の大切さを教えなければならない（マタイ18：20、IIテモテ3：16）。それは、信者は主の前を日々正しく歩むという責任をお互いに負っているからである。もし、兄弟が罪を犯した場合、その兄弟を責め、悔い改めに導く責任が双方にある（マタイ18：5-22、使徒5：1-11、Iコリント5：1-13、IIテサロニケ3：6-15、Iテモテ1：19-20、テトス1：10-16）。また、長老たちの働きを助けるために、執事たちが立てられている。これらの教会リーダーたちは、どちらもみことばの基準に適した者でなければならない（Iテモテ3：1-13、テトス1：5-9、Iペテロ5：1-5）。

神は教会に霊的賜物を与えられた。それは、信者を整えて奉仕の働きをさせるための選ばれた働き人（エペソ4：7-12、長老、監督、牧師・教師）と、信者各自に与えられた特別な霊的賜物である（ローマ12：5-8、Iコリント12：4-31、Iペテロ4：10-11）。

賜物には、使徒たちが語ったことばの真実性を証明するために、神が与えられた奇蹟の賜物（例えば、癒し、異言）（ヘブル2：3-4、IIコリント12：12）と、信者を整えてお互いを教化するためにすべてのクリスチャンに救いとともに与えられた働きの賜物がある。

私たちは、サタンが人々を惑わすために、この奇蹟の賜物を用いることがあることを知っている（Iコリント13：13-14：12、黙示録13：13-14）。この奇蹟の賜物は、聖書の完成によりその必要性がなくなったことにより消滅し、今日において存在する賜物は、信者の教化のために与えられた非啓示的賜物である（Iコリント13：8-12、ローマ12：6-8）。

教会に与えられた礼典はバプテスマと聖餐式である（使徒2：38－42）。バプテスマは、すでに、神がクリスチャンの心のうちに為された救いのみわざを見える形で公に証するものであるため、浸礼を施す。すなわち、水に完全に浸かることは、キリストとともに死んだことを、その水より上がることは、ともに新しいいのちへとよみがえったことを表わすからである（使徒8：36－39、ローマ6：1－11）。

バプテスマを受けることによって救いに与ることは決してない。しかし、信仰によって救いに与ったクリスチャンがバプテスマを受けることは、主の命令に服従することである。

私たちは、聖餐式はイエスの十字架の死を記念する儀式であると信じる。食するパンやぶどうジュースは、主イエスのからだでも血でもなく、主の十字架の死を象徴したものである。それゆえ、クリスチャンにとって聖餐式とは、主に対する自らの信仰を吟味し、主にお会いするまで熱心に福音を宣べ伝えようという新たな決意の機会でもある（Iコリント11：28－32）。

教会の目的は神の栄光を現すことである（エペソ3：21）。（1）各キリスト者の信仰が成長することにより（エペソ4：13－16）、（2）キリストに喜ばれる交わりを持つことにより（使徒2：47）、（3）礼典を守ることにより（使徒2：38－42）、（4）世に福音を伝えることにより（マタイ28：19、使徒1：8、2：42）、（5）すべての信者がそれぞれに与えられた霊的賜物を用いて奉仕に励むことにより（Iコリント15：58、エペソ4：12、黙示録22：12）、神の栄光が現されるのである。

VI. 「天使」

私たちは、神が無数の天使を創造されたことを信じる。それゆえ、被造物である彼らを崇拝することは罪である（詩篇148：2、5）。天使は、神から特別な務めをいただいて、人の形を取るとき以外は、肉体を持たない霊的な存在である。「天使」ということばは、旧・新約聖書を通して「使者（メッセンジャー）」という意味を持っている。彼らは、神に仕え、礼拝するために造られた（ルカ2：9－14、黙示録5：11－14、19：10、22：9）。彼らは、私たち人間よりも知識と力において勝ってはいるが、神のように全知、全能ではない（IIサムエル14：20、IIペテロ2：11、ルカ4：34）。天使は墮落しなかった良い天使と、墮落した悪い天使とに大きく分けられる。

A. 「墮落しなかった良い天使」

罪を犯すことなく神に従い続けている良い天使たちが無数に存在する。その代表として、ケルビム（神の御座を守護する。創世記3：24、出エジプト25：17－20）、セラヒム（天において礼拝を導く。イザヤ6：2）、ミカエルという天使長（黙示録12：7－10、ユダ1：9、ダニエル10：21、12：1）、ガブリエル（ルカ1：19、26－38、ダニエル8：16、9：21）が存在している⁵。

B. 「墮落した悪い天使」

私たちは、神によって創造された天使たちの中に、自らの意志によって神に反逆し、罪を犯した天使たちが存在することを信じる。この罪こそ、神によって造られたものによる最初の罪

⁵ 旧約に登場する「主の使い」とは、受肉前のイエス・キリストである（創世記16：10－13、22：11－12、士師記13：3－21、ゼカリヤ1：12）

であり、悪の起源であると信じる。この背信行為の指導者は、サタンと呼ばれる天使であり、彼こそ、罪の創始者であり、エバを誘惑することで人類に罪を持ち込んだ張本人である（創世記3：1－15）。

サタンは、未信者を惑わし、何が真理であるかを悟らせないように、また、救いを受け入れないようにと誘惑する（ヨハネ8：44、Ⅱコリント4：3－4、Ⅱテサロニケ2：9－10）。また、クリスチャンが神の栄光を現すことがないように誘惑し、神のみこころに背いて生きるようにと巧妙に信者の心に働く（Ⅰテモテ4：1－3、Ⅰペテロ5：8、9）。

サタンは一人であり、彼に仕える無数の墮落した天使たちを悪魔と呼ぶ。主イエスは、その死と復活により、この敵であるサタンの力を打ち砕かれた。また、サタンはキリストが地上再臨される時、縛られ、千年の間、深い淵に閉じ込められ、そして、千年後にその淵からしばらくの間解き放たれた後に、火の池で永遠にさばかれるのである（マタイ25：41、黙示録20：10）。

VII. 「終末」

私たちは、救われている者のたましいは、死後、主イエスのもとへ引き上げられ、空中再臨（空中携挙）のときまで主イエス・キリストとの喜びある交わりの中に留まると信じる（ルカ23：43、ピリピ1：21－24、Ⅱコリント5：8、Ⅰテサロニケ4：13－17）。空中再臨では、すでに死んでいた教会時代のクリスチャンたちが栄光のからだをもってよみがえり、次に、生き残っている信者が栄光のからだに変えられて空中で主キリストにお会いするのである（Ⅰテサロニケ4：15－17）。私たちは、この空中再臨の日がいつ訪れても不思議ではないほど切迫していることを信じる。

私たちは、この空中再臨後7年間の患難時代を経て、イエスが肉体をもってこの地上に、教会時代のクリスチャンたちを伴って再臨（地上再臨）されることを信じる（Ⅰテサロニケ4：14、コロサイ3：4、ユダ14）。その際、旧約時代と患難時代の信者たちがよみがえって栄光のからだをいただくのである（ダニエル12：2－3、黙示録20：4－6）。この再臨（空中・地上）の際の復活が第一のよみがえりであり（黙示録20：4－6）、この復活に与る者は幸いな者と呼ばれる。彼らは主とともに、栄光の中で永遠に過ごすことになるのである（ピリピ3：21、Ⅰコリント15：35－44、50－54）。

私たちは、すべての人間は肉体をもってよみがえることを信じる（ヨハネ5：28－29、黙示録20：12－13、ローマ8：10－11、19－23）。罪が赦されていなかった罪人のたましいは死後、第二のよみがえりまで苦しみのハデスに行く（ルカ16：19－26、黙示録20：13－14）。そして、空中携挙、患難時代、その後の千年王国時代を経た後に、肉体とたましいが一つにされるとき、すなわち、よみがえりの日（ヨハネ5：28－29）に、彼らは一人ずつ神の前でさばきを受ける。このさばきは「大きな白い御座のさばき」と呼ばれ、その結果、彼らは「火と硫黄との池」、すなわち、地獄へと送られ、永遠に尽きることのない苦しみを受けるのである（黙示録20：11－15、マタイ25：41－46、ダニエル12：2、ヨハネ5：29）。このさばきはクリスチャンたちがその信仰の忠実さに応じて主から報いをいただく「キリストのさばきの座」（Ⅰコリント3：11－15、Ⅱコリント5：10）とは異なるものである。

罪人はサタンと悪魔のために備えられた「永遠の火」、すなわち、地獄で永遠に苦しみ続けるのである（マタイ 25 : 41、黙示録 20 : 10）。

VIII. 「永遠」

私たちは、この世が滅ぼされた後、神は新しい天と新しい地を創造され、クリスチャンたちはここで神との交わりを永遠に楽しむことを信じる（Ⅱペテロ 3 : 10、黙示録 21 : 1、黙示録 21 : 22 - 22 : 5）。

浜寺聖書教会の教会組織

浜寺聖書教会は、長老たち（聖書では常に複数で書かれている）のほかに、その働きを補佐する執事たち（男女を含む）といった霊的リーダーたちと、霊的に成長することを願いながら、日々みことばの教えに従う教会員たちによって構成されています。

I. 「長老」

聖書には「牧師」、「長老」、そして、「監督」と呼ばれる教会のリーダーたちのことが記されていますが、それらは全く異なった三種類の働き人ではなく、同じ働き人を説明するものです。「長老（プレスブテロス）」とは、「白髪の、年をとった人、年長の、老人の」という意味です。ちょうど、年をとった人、つまり、「長老」がその賢明さゆえに、この世の人々から尊敬されるように、教会における霊的リーダーである「長老」も、その霊的な知恵において賢明な人であるというところから、この呼び名が使われたのです。

また、「監督（エピスコpos）」とは、「監督者、後見人、保護者」という意味です。彼らの教会における責任は、神から託された群全体に気を配り（使徒 20 : 28）、群れを守ること、すなわち、「監督」することが務めであることを教えるために使われました。主イエスが、人々のたましいの牧者であり、監督者であるように、長老たちも、群全体を監督しなければなりません（Ⅰペテロ 2 : 25）。パウロはテモテに対して、「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。」（Ⅰテモテ 5 : 17）と教えました。この中の「指導（プロイステミ）」という語の意味は、「前に立つ、管理する、総括する、治める」です。このことから長老に監督の責任があることがわかります。

そして、「牧師（ポイメン）」とは、「羊飼い、牧者」という意味です。託された羊を監督するだけでなく、養い育てていくのが務めであることを示すために使われたのです。長老たちは、大牧者である主イエスから託された羊を正しく導き、その群れを監督し、そして、彼らを養い育てるという責任が与えられた教会の霊的リーダーなのです。

A. 「長老たちの働き」

長老たちは教会の霊的なリーダーとして、常に主のみこころを求め、それに基づいて教会を導くことが必要です。それには、教会の方針を決めること（使徒 15 : 22）、全体を監督し

(使徒20:28)、みことばの教えによって教会員を養い(1テモテ5:17)、励まし指導し、ときには、罪を犯している人を戒めて正すことが含まれます(テトス1:9)。また、人に按手を施し(1テモテ4:14)、教会の模範となるように努めるのです(1ペテロ5:1-3)。

☆牧師・教師(長老会の一員)

神がご自分の教会を長老たちとともに牧させるために召され、教会に遣わされたのが牧師です。牧師は、神から教会に与えられた賜物です(エペソ4:11)。長老会の一員である牧師の最も大切な働きは、他の長老同様に、みことばを教えることです。それは、遣わされた教会の聖徒たちの信仰が成長し、それぞれが神の働き人として奉仕の働きを行うようになるためです(エペソ4:12)。また、他の長老たちとともに群全体に気を配り、監督することです(1ペテロ5:2)。

B. 「長老たちの資質」

1テモテ3:1-7、また、テトス1:5-9には、21の資質が記されている。

- (1)「非難されるところがない」：罪を犯さないキリスト者はいません。しかし、教会の霊的リーダーはキリスト者としてふさわしくない行動をしないように気を付けている人。
- (2)「一人の妻の夫」：一人の女性を愛し、貞操を守っている人。
- (3)「自分を制する」：自制、また、霊的に安定した人。
- (4)「慎み深く」：分別、また、知恵があり、軽率な考えに基づいて判断しない人。
- (5)「品位があり」：秩序正しく、規律ある生活を営んでいる人。
- (6)「良くもてなす」：自分に神から託された物質的祝福を、必要ある他の人と惜しみなく分かち合う人。
- (7)「教える能力がある」：聖書の真理を人にうまく伝えることができる人。
- (8)「酒飲みでない」：酒の奴隷、また、常用者でない人。
- (9)「暴力をふるわず」：行動だけでなくことばにおいても闘争的でない人。
- (10)「温和」：あたたかく、穏やかな人。
- (11)「争わず」：喧嘩や口論、利己的な議論をしない人。
- (12)「金銭に無欲(不正な利を求めない)」：金を愛さない、また、奴隷でない人。
- (13)「自分の家庭を良く治める」：信仰のリーダー、また、先輩として家族の者から尊敬されている。また、威厳をもって子どもたちをしつけ、育てている人。
- (14)「信者になったばかりの人でない」：霊的に成長した人でなければならない。
- (15)「教会外の人にも評判がよい」：その人の性格、人格に対して尊敬を受けている人。
- (16)「わがままでない」：自分中心で、自分のこと、また、自分の考えしか受け入れない人であってはならない。
- (17)「短気でない」：爆発しやすい気質、気性でない人。
- (18)「善を愛する」：罪や悪だけでなく、すべてのことにおいて神のみこころを行いたいと願っている人。
- (19)「正しく」：公平で公正な人。義と聖さに基づいた客観的判断ができる人。
- (20)「敬虔」：聖く、罪から離れている人。

(21) 「みことばをしっかりと守る」：信仰において安定、みことばに従順な人。

II. 「執事」

A. 「その働き」

新約聖書において執事に関することばは三つあります。まず、人物を表す「ディアコノス (diakonos) とは、「奉仕者、使用人、召使い」を意味する名詞です。また、「ディアコニア (diakonia) 」とは、働きを現す名詞で、意味は「奉仕」です。そして、最後の「ディアコネオ (diakoneo) 」とは、「仕える」という意味をもった動詞です。これらのことばから分かるように、彼らの働きは仕えること、また、助けることです。

1. 「物質的 necessary を満たす」

初代教会において、教会の大切な働きの一つは、人々の「物質的 necessary を満たすこと」(特に、やもめや貧しい人々を援助すること) でした。この働きのために、使徒たちは7名を選出したことが記されています(使徒6:2-4)。この選ばれた7名は、初代執事たちではありませんが、このことから後に登場する執事たちの働きを知ることが出来ます。彼らは教会の中で、物質的 necessary を覚えている人々の世話をしたのです。「給仕」という語が「執事」に使われているのはそのためなのです。

2. 「長老たちを助ける」

彼らは長老(牧師、監督)たちが「祈りやみことばの奉仕」といった霊的な働きに十分な時間を取り、専念できるように助けました。また、彼らが霊的なリーダーであったことは、彼らの資質が「教える能力」以外は、長老のものと同じであることから分かります。彼らは霊的なリーダーとして、家庭や教会において良き模範を示していることが必要です。

B. 「その資質」

「長老の資質」の「教える能力」を除いて、長老と執事の条件は同様です。

III. 「聖徒」

A. 「聖徒とは」

主イエスによって救われた者はすべて聖徒であり、神の家族に属する兄弟姉妹です。そして、水のバプテスマ(洗礼)を受けて、地域教会の教会員になります。

B. 「長老・執事との関係」

教会は、長老、執事、そして、聖徒が霊的に一致し、愛のうちに建て上げられていくものです。教会の大牧者はイエス・キリストです。その大牧者から遣わされた大切な器が牧師です。牧師がたとえ若くても、尊敬し、大切にし、軽々しく批判しないようにしましょう(I テモテ 5:17)。また、みことばに記されている霊的資質に適う者として選ばれた執事も同様に尊敬し、そのリーダーシップに従いましょう。聖徒はこのような教会の霊的リーダーたちが、常に、神のみこころに沿って教会を導いていくことができるように、彼らの霊性のために祈り続けることが大切です。また、長老がみことばの奉仕と祈りに専念できるように協力し、長老の生活や研修、休暇などの点でも配慮することが必要です。聖徒の世話をするために立てられた

霊的リーダーなので、必要なことがあれば、長老たち、また、執事たちに相談をすることです。

浜寺聖書教会の教会運営

浜寺聖書教会の運営は、聖書が教えるように、複数の長老たち（男性のみ）によって行われます。

I. 「長老会」

教会員の審査を受けて選ばれた長老たちによって、長老会は構成されます。長老会の役割は、主のみこころを知ることです。教会は、主イエスがご自身の血をもって買い取られたものです（エペソ5：25）。ゆえに、長老会は主のみこころに沿って群れを導かなければなりません。長老会での決定は、各自がみこころを求めながら、みことばの学びと祈りをした上で、全員一致をもってなされなければなりません。

II. 「執事」

教会員の審査を受けて選ばれた執事は、みことばにある教会の霊的リーダーにふさわしいとして教会員から選ばれたのだということを、各自がしっかりと自覚し、礼拝出席、奉仕、献金など、すべてのことにおいて聖徒の模範となることを心がけることが必要です。執事の責任を果たすためには、各人が常に「みこころを知るにふさわしい人」、つまり、神の前に霊的であり続けることが不可欠です。

III. 「責任役員会」

宗教法人法に定められた教会の役員会で、長老会によって推薦され、教会員によって承認された信徒代表によって構成されます。

クリスチャンとしての生き方

「神の栄光を現す」、この目的のために私たちクリスチャンは生きています（Ⅱコリント 3：18、4：5-6、エペソ 1：11-12、14）。パウロは「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」とコリント教会のクリスチャンたちに命じています（Ⅰコリント 10：31）。私たちの言動が、また、その背後にある動機が常に神に喜ばれ、神の栄光を現すものであるならば、それはどんなにすばらしいことでしょう。確かに、私たちはこの地上の生活において罪との戦いを経験しています。神の栄光のために生きたいとする新しい願いと、罪の中を生きていた救われる前の生き方への願望が今も存在していることを知っています（ローマ 7：15-23）。この葛藤は、私たちが天に上げられ、栄光のからだをいただくまで続きます。しかし、私たちの弱さ、愚かさをだれよりも知っておられる神は、そんな私たちがどのように生きていくべきかを教えてください。神の栄光を現す生き方とは、実際に、どのようなものかを考えてみましょう。

【その目的】

I. 「礼拝者となること（救われること）」

すべての人間は、生まれながらに神の敵です（ローマ 5：10）。神の栄光のためではなく、自分の栄光を現すことにだけ関心をもって生きている罪人です。このような人間が、神の栄光を現す者になるために最も大切なことは、まず、この神と和解することです。そのためには、神に対する自らの罪を認め、心から罪を悔い改め、主イエスをご自分のいのちをもって完成してくださった贖いのみわざを信じるのです。そのとき、その罪人は罪を赦され、神を礼拝する者、神の栄光のために生きる者に変えられるのです。神の備えてくださった唯一の救いを受け入れることが絶対条件なのです。

II. 「日々、霊的に成長すること（キリストに似た者となる）」

神は霊とまことによって礼拝する真の礼拝者を求めておられます。神の恵みによって救われた者が、霊とまことによって神を礼拝できる者となるのです（ルカ 19：10、ヨハネ 4：23）。神はクリスチャンが霊的に成長し、キリストに似た者に日々変えられていくために、みことばと聖霊を与えてくださいました。クリスチャンが神の栄光を現し続けるためには、日々の霊的成長が必要なのです。

【霊的に成長するために】

それでは、神が喜ばれる真の礼拝者（霊的に成長した者）となるため必要なことは何でしょうか？ 何もしない人に霊的成長は無縁です。私たちには霊的に成長し、神の栄光を現し続けるという

責任があります。靈的に成長したい、主の教えに従いたいと願う者に、神は必要な助けを与え続けてくださいます。靈的成長に欠かすことのできない八つの秘訣を見てみましょう。

I. 「靈的成長を望む」

私たちが成長するためには、まず、そのことを求めることが必要です。あのパウロでさえ自分の信仰に甘んずるどころか、成長を願い続けました（ピリピ3：12－14）。また、ペテロも同様に、生まれたばかりの乳飲み子のように、みことばを慕い求めることを命じています（Iペテロ2：2）。まず、「もっと神の栄光を現す者になりたい」と願うことが大切です。

II. 「聖靈に満たされる」

聖靈に満たされるとは、私たちの考え、思い、ことば、そして、行動のすべてが聖靈なる神によって支配されることを言います。私たちは自分のすべてを神に明け渡し、聖靈に支配していただき続けることが大切です。神の導きを信じて、思いも考えも、また、しようとする行動も、すべてを神に委ねることが大切です。聖靈に満たされた人には喜び、感謝があり、そして、従順な歩みをする人だとパウロは教えます（エペソ5：18－21）。また、みことばを蓄えることにより、聖靈に満たされたときと同じ結果が生じることから、この二つが密接に関係していることがわかります（コロサイ3：16－17）。

III. みことばの学び

A. 「その大切さ」

どうして神は私たちに聖書を与えられたのでしょうか？私たちが困ったときにだけ開いて慰めを得るためでしょうか？ただ、心の騒ぎを鎮めるためでしょうか？神が聖書を与えてくださったのは、私たちが創造された本来の目的であり、また、生かされている最大の目的、つまり、神の栄光を現す者となるためです。私たちが造られた神はどのようなお方なのか？また、どのような生き方が神に喜ばれ、また、悲しませるのか？何が神のみこころなのか？といった、私たちが目的に沿って生きるために必要なことが、この聖書には記されているのです。神は、私たちが知らなければならないこと、必要なことを教えようとしておられるのです。また、みことばによって教えられる神のすばらしい計画、約束は私たちの信仰に強い確信を与えてくれます。

まず、（1）みことばは私たちに勝利を与えてくれます。サタンや（マタイ4：1－11）、悪魔たち（ルカ4：33－36）、そして、誘惑に対して勝利を与えてくれます（エペソ6：17）。（2）みことばは私たちの成長の源です（Iペテロ2：2）。（3）みことばは私たちの力の源です（ヘブル4：12、ローマ1：16）。（4）みことばは私たちを導きます（詩篇119：105）。そのため、みことばはクリスチャンにとって最も大切で掛替えのないものです。

もし、私たちが神に喜ばれる礼拝をささげようと願うなら、そのためには、まず、みことばを正しく理解し、そこに示される真理の土台にしっかりと立つことが必要です。また、みことばを信じ、尊敬し（ヨブ23：12、詩篇138：2）、愛し（詩篇19：10、119：

97)、宣べ伝え(Ⅱテモテ4:2)、学び(Ⅱテモテ2:15)、従い(Ⅰヨハネ2:5、6、ローマ6:16)、その真理のために戦うことが必要です。みことばによって、私たちの生活のすべての面が支配されることが大切です。

1. 「正しい態度(みことばを学ぶときの態度)」

個人の学びであろうと、それが、礼拝、また、各種の集会であろうと、常に「主よ、どうぞお語りください。しもべはあなたのみ声を聞き、もっとあなたのことを知りたいのです。」という積極的で、且つ、謙虚な態度が必要です。そのためには、まず、自らの心を探り、そこに潜む罪を告白して清められることが必要です。また、常に、ともにいて教えてくださる聖霊に拠り頼むという態度を失ってはなりません。

2. 「実践(みことばを学んだ者の責任)」

みことばの学びは霊的成長には不可欠です。しかし、学んだ知識をただ蓄えているだけでは霊的成長を期待することはできません。学んだ真理を実生活において実践していくのです。日々の生活において、みことばを実生活に適用していくのです。ヤコブは「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」(ヤコブ1:22)と命じました。

*** 「みことばの学び(個人での学び方:だれにでもできる学び)」 ⇒ 付録(2) 参照**

B. 「神に従う」

1. 「みことばに従う者となる」

「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」(ヤコブ1:22)。「みことばを学んではいても、自分の人生にそれほどの変化をもたらさない」、「信仰生活に力がない」というような問題の原因は、みことばをただ聞いているだけで実行しないところにあります。

このようなことを起こさないために、次の三つのことが重要です。

まず、第一に「瞑想」です。個人のディボーションや集会で語られたみことばをじっくりと瞑想することが大切です。実行する気持ちがいくらあっても、何をすべきなのかをすぐに忘れてしまっていてはできません。神が語ってくださったことをいつもしっかりと覚えることが必要です。

第二に「決心」です。みことばは、私たちクリスチャンにみことばの実践を命じました。それは、実践する人が少ないからです。実践しない人が挙げる理由の一つに「したくないから」というのがあります。これでは何も望めません。主の命令に逆らっている人には神の祝福はありません。その人から喜びや感謝が取り去られてしまいます。また、ある人は「やれるかどうか分からないから」と、心配ばかりが先に立って何もできないでいます。また、「私にはできない、無理だ」と、初めからあきらめている人がいます。神は私たちがどんなに弱いのかを知っておられます。その上で、「従いなさい」と命じておられるのです。神の言われたことに「はい、主よ」と言って従順に従おうとする決心が必要です。

第三は「祈り」です。決心したことを実行するために必要な力を与えてくださる神の助けを求めることが必要です。私たちの力には限界があります。しかし、神はその弱い私たちのうちに働いてわざを為してくださるのです。私たちがこの神の備えてくださる力によって為すとき、

その神のみ栄えが現されます。

2. 「みこころに従う者となる」

救われる前の私たちは神のみこころを全く無視して、自分の思いのままに生きて来ました。自分を喜ばせることを人生の目的とし、そこには神への思いなど微塵もありませんでした。しかし、救われた私たちは、そのような生活に背を向けて新しい歩みを始めたのです。自分の計画ではなく、神の計画、つまり、みこころに沿って歩む生活です。その大切さは次のことからわかります。

- (1) 私たちは人生を計画する資格がない（エレミヤ10：23）
- (2) 神だけが未来を知っている（イザヤ46：9、10）
- (3) みこころは人生に祝福をもたらす（詩篇119：97－100）
- (4) みこころは死後に祝福をもたらす（Iヨハネ2：17）
- (5) みこころを知ることを神は望んでいる（コロサイ1：9）
- (6) みこころを知ることを神は命じている（エペソ5：14－17）
- (7) みこころに従うことを神は命じている（エペソ6：6）
- (8) みこころへの正しい態度

神のみこころを知り、それを実践することは神の栄光のために生きる上で不可欠です。神は私たちがみこころを知り、そのみこころに沿って生きることを望んでおられます。そして、みこころを求める者に、神はみことばを通してそれを示してくださいます。みこころを知ることに関して最も大事なことは、「私は、神がみこころを示されるにふさわしい歩みをしているかどうか？」なのです。私たちはよく「みこころ」ということばを耳にし、また、口にします。しかし、神は、私たちが本当に神のみこころを求めているのか、それとも、自分の願いがみこころとなることを願っているのかをご存じです。

ですから、みこころを口にする前に「私は本当に神のみこころを知ることを心から願っているのか？」を自分自身に問い掛け、心を探ってみることが大切です。自分の本当の思いを知るために、次のような問い掛けをしてみてください。「この願い求めていることがみこころでなければ、私は喜んでそれを捨てることができるか？たとえ、どのように辛く、悲しくても、みこころに従っていくか？」と。きっと、心の本当の動機が見えるでしょう。

みことばは主のみこころが何かを明確に教えています（Iテサロニケ4：3、5：16－18）。みことばに従い、啓示されたみこころを行い、主を喜ばせる「ふさわしい歩み」を実践しているとき、私たちの思いは神の思いと同じものに変えられていきます。そして、そのように歩んでいる者の心に、神はご自身の思い、つまり、みこころを「願い」として与えてくださるのです。そして、みこころに従うとき神のすばらしい祝福、すなわち、神ご自身の喜び、感謝、平安がその人に与えられます。

*** 「みこころの見つけ方」については ⇒ 付録（3）を参照**

3. 「正しい選択をする者となる」

私たちは、毎日、数え切れないほどの選択をしています。それは、衣食のように日常的なことから、死活に関わるような大きなことまで様々です。また、神との関係だけに限ってみても、私たちは日々、数多くの選択をしていることに気がきます。「神に逆らうことをしよ

う」、「悔い改めずに逆らい続けよう」、「人を妬もう」、「悪口を言おう」、「赦さないでおこう」、「落ち込んでいよう」等など。日々、神を覚え、礼拝する人は、たとえ、どのような状況でも、何が起ころうとも、たとえ、失望するようなことがあっても、常に、神が喜ばれることは何か？また、どういう選択をすることが神に喜ばれるのかを考えます。こうして、正しい選択を、毎日の生活の中で実践していくとき、神のすばらしさがこの人たちを通して現されるのです。

IV. 「みことばを語る」

A. 「信者へ（お互いの成長のため）」

みことばは「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益」（Ⅱテモテ3：16）であると教えます。信仰の成長にみことばは不可欠です。みことばを学んでいるクリスチャンには、次の二つのことが命じられています。

1. 「みことばを伝える」

みことばを学んだ人の責任は、それを他の人に伝えることです。その方法は自らの実践と教えることによってです。私たちが、みことばを実践するとき、神がその人のうちに働かれ、みことばの真実さが人々に明らかになります。また、自分のことばではっきりと語ることで、その真理が明らかになります。信者がみことばをもって互いに養い、みことばに従うようにと励まし合うなら、そこにすばらしい成長を見ることでしょう。

2. 「みことばによって励ます」

私たちが問題に直面したとき、また、そのような兄弟姉妹を励まそうとするときは、まず、みことばがどのように教えているかを個人で、また、その人といっしょに探ることが大切です。その上で、その教えに従っていけるようにと、お互いに励まし合い、また、祈り合うのです。

B. 「未信者へ（伝道）」

「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」（Ⅰテモテ2：4）。そして、この福音のメッセージを、すべての造られた人々に語るようにとの命令を、イエスは信者一人ひとりに与えられました。その方法は「生き方」と「教え」です。私たちが、神を愛し、畏れをもって従っていくとき、神は私たちをイエス・キリストに似た者へと変えてくださいます。そのときに主のすばらしさが人々に証明されるのです。また、はっきりとことばで語る必要があります。神が語るべきことを、語るべき方法で語らせてくださることを信じて、大胆に語る必要があります。私たちの責任は福音を伝えることであり、救うことではないことをしっかりと覚えておかねばなりません。そうしなければ、「語っているのにだれも救われない」と失望することになってしまいます。神がこのすばらしいメッセージを語るという特権を与えてくださったことに感謝し、そのメッセージが用いられることを祈り期待しながら語り続けることです。

V. 「祈り」

祈りとは、生きた真の神への礼拝であり、神との個人的な交わりです。また、この神のすばらしさ、偉大さを神ご自身に証していただく機会でもあります。ですから、「自分の必要や要求だけを祈る」という利己的な祈りは正しい祈りではありません。私たちの生きている目的が、神の栄光のためであり、そのためにすべてのことをする以上、当然、祈りもその中に含まれます。祈りを通して、神の栄光が現されることを念頭に置かなければなりません。正しい祈りの至高の例は、主イエスが弟子たちに教えられたあの「主の祈り」と呼ばれているものでしょう。イエスは、私たちがこのことば通りに祈るようと教えたのではなく、この祈りの模範に倣って祈るために与えられたのです。この模範的祈りが教える三つのことを覚えてください。

A. 「与えられた特権を知る」

すべてを創造し続べ治めておられる全知全能の真の神が、あなたのために時間を取ってください、交わってくださいというこの信じ難い特権を覚えることです。また、このように偉大な神を「アバ」、つまり、「お父さん」と呼ぶことのできる関係に入れてくださったことも覚えて感謝するのです。

B. 「神を崇める」

あなた自身の願い事を言う前に、あなたと交わってくださいこの神がどんなに偉大な方かを考えて、心からの畏れをもって称え、崇めることです。

C. 「神の栄光が現されることを期待する」

どんなことでもこの神の前にもっていける、つまり、祈れるということは、私たちにとって大きな祝福です。私たちの必要も、慰めも、励ましも、助けも、どのようなことでも神に祈り、委ねることができます。また、熱心に祈り続けることも大切です。しかし、それだけが祈りだとするならば、それは間違いです。なぜなら、祈りとは、私たちの必要、また、欲しいものを得るための魔法ではなく、神ご自身の栄光を現す機会だからです。私たちは自分の望むものが与えられなかったとしても、神の栄光が現されるならば、そのことを喜ぶはずで、ゆえに、私たちの必要を神に祈るとき、「私のすべての必要をご存じの神よ、私のすべてはあなたのものです。あなたは必ず必要を与えてくださることを信じています。しかし、私が心から望むことは、もし、与えないことがあなたの栄光を現すのでしたら、どうぞ、与えないでください。そして、与えてくださるのなら、どうぞ、あなたの栄光が最も現される方法で与えてください。」と祈ることです。

VI. 「罪の告白」

「告白」と訳されていることばは、「同じことを言う」、「同意する」という意味です。つまり、自分の罪に対して神が言われることに同意することです。そのためには、神がご覧になるのと同じように、正直に自分の罪を見ることが必要です。「主を恐れることは悪を憎むことである」（箴言 8 : 13）とあるように、私たちは罪から離れることが必要です。私たちの聖い神は、たとえ、それがどんなに小さな罪でも見逃すことや、さばかないで放っておかれることはありません。神はアカンの罪をさばかれました（ヨシュア 7 : 19）。また、エリの子どもたちをさばか

れました（Ⅰサムエル4：11）。神は罪を憎まれます。神を礼拝する人は、その愛する神と同じ思いをもつことが必要です。つまり、神の愛するものを愛し、憎まれるものを憎むことです。そのためには、次のことを実践する必要があります。

A. 「神を覚える」

私はどのような神を信じたのか？また、どのような神が、私の心から言動に至るまでのすべてを日々見ておられるのかを、常に覚えておくことが必要です。

B. 「罪の結果を覚える」

私の行為が善であれ、悪であれ、キリストのさばきの座で必ずさばかれることを覚えておくことが必要です。「私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」（Ⅱコリント5：10）。全知の神の前ではどのような弁解も決して通りません。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」（ヘブル4：13）。

C. 「罪を示されるように求める」

ダビデのように、心に潜むどんな罪も示していただくことを求めることも必要です（詩篇139：23、24）。罪に気付かないでいることがないように、常に、みことばによって自分を吟味し、聖霊によって過ちが責められることを願いながら日々を過ごすのです。

D. 「罪を直ちに告白する」

罪は弁解せずすぐに告白することが必要です（Ⅰヨハネ1：9）。ダビデは、預言者ナタンによって罪を責められたとき、弁解をすることなく、直ちに、その罪を主に告白し、赦しを求めました。

VII. 「靈的賜物を用いて仕え合う」

神が教会に与えられた使徒、預言者、伝道者、牧師・教師たちは、みことばを教えることでキリスト者たちを整えるという大きな責任をもっています。それは、学びを受けたすべてのクリスチャンたちが、奉仕の働きをするためです（エペソ4：11、12）。クリスチャンはみな働き人であり、お互いの靈的成長のために必要です。パウロはローマ書12章で、人のからだを用いてそのことを教えています（12：4-8）。またペテロも、すべてのクリスチャンが神が与える靈的賜物の管理者であり、それらを用いて互いに仕え合う奉仕者であると教えています（Ⅰペテロ4：10、11）。各自がそれぞれに与えられた靈的賜物を用いて互いに仕え合うとき、その群全体が成長します。この靈的賜物と才能とは同じものではありません。靈的賜物とは「神が、奉仕のためにすべての聖徒たちに与えた能力」です。

パウロはⅠコリント12：4-7で、四つのことばを用いて、靈的賜物について次のように教えています。

(1) 「賜物」[カリスマ (charisma)] 4節 : カリスとは「恵み」という意味があります。

つまり、霊的賜物は私たちの希望によって与えられるのではなく、神の一方的な恵みによって与えられるものです。

(2) 「奉仕」[ディアコニア (diakonia)] 5節 : これは「仕える、奉仕、援助、世話」という意味があります。つまり、賜物は自分のために用いるのではなく、人のために、人に仕えるために与えられたものです。「執事」は、この語から来ています。

(3) 「働き」[エナーゲオ (energeo)] 6節 : これは「働く、活動する、力を発揮する」という意味があります。つまり、この奉仕は、神の力によって力づけられて行うものです。英語のエナジーは、この語から派生したものです。

(4) 「現れ」[ファネロシス (fanerosis)] 7節 : これは「明らかにする、公表、顕現」という意味です。つまり、賜物はそれを用いて働かれる聖霊なる神のすばらしさを、周りの人々に明らかにするために与えられたものです。

このように霊的賜物とは、人が救われたときに神が与えてくださるもので、救われる前から持っていたものではありません。救われる以前に持っていた才能も、神は用いてくださいます。しかし、これらの才能は霊的賜物ではありません。あなたに与えられた賜物が何か？今はわからなくても、「主よ、どうぞ、他の人のために私を用いてください。自分の霊的成長のためではなく、だれかの成長のために私を用いてください。何かさせてください。」という祈りと願いをもって、何でも喜んで、また、自ら進んですることが大切です。働きを始めた後に、自分の賜物を知ることよくあることです。

VIII. 「神の栄光を現す人となる

その人は、性質や行いにおいて神に似ている人です。

・決して人には分け与えることのできない神だけのご性質

遍在 (詩篇 139 : 7-10)、 永遠 (詩篇 90 : 2)、 自存 (イザヤ 41 : 4)

・私たち人間が持つことのできる神の持つておられる属性

知恵 (ダニエル 2 : 20)、 真実・誠実 (申命記 32 : 4、詩篇 31 : 5、ヨハネ 3 : 33、I コリント 10 : 13)、 愛 (I ヨハネ 4 : 16)、 善 (詩篇 27 : 13)、 義 (詩篇 4 : 1、ローマ 3 : 26)、 あわれみ (出エジプト 34 : 6、II 歴代 30 : 9)、 聖さ (I ペテロ 1 : 16、詩篇 99 : 3)、 忍耐 (ローマ 15 : 5)、 平安 (ヘブル 13 : 20、イザヤ 9 : 6)、 親切 (エペソ 2 : 7)、 柔和 (マタイ 11 : 29)、 喜び (詩篇 16 : 11)、 赦し (ネヘミヤ 9 : 17)

このような神のご性質がクリスチャンのうちに形成されていくことを神は望んでおられます。また、すべてのクリスチャンはこのように人に変えられていくことが可能です。そのために、神はそれぞれのうちに聖霊なる神を、また、みことばを与えてくださいました。みことばを理解するために、教師として聖霊なる神が、また、長老たちが与えられました。そして、ともに祈り励まし合うために、神は教会と兄弟姉妹を私たちに与えてくださいました。神はすべてのクリスチャンにこの命令を与えられました。なぜなら、このような人に変えられることによって神の栄光が現されるからです。

クリスチャンの責任

I. 「家庭における責任」

A. 「夫として」

キリストが教会に示されたその犠牲的愛に倣って、夫は妻を愛さなければなりません（エペソ 5：25）。それは自分を喜ばせ、また、幸せにするために何かを妻に期待したり、求めたりするのではなく、かえって、妻を喜ばせ、幸せにするために何をしなければならないかを考え、行うのです。また、「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」（創世記 2：24）とあるように、夫婦は二人ではなく一人であるために、何よりもまず、夫婦の関係が優先されなければなりません。夫はだれよりも妻を、また、妻は夫を愛することが大切です。子どもよりも、また、自分たちの両親よりも、仕事よりも、教会よりも、夫婦は互いを優先させなければなりません。つまり、夫にとって神の次に大切な存在は妻なのです。

B. 「妻として」

妻は主イエスに仕えるように、かしらである夫に仕えなければなりません（エペソ 5：22-24、テトス 2：5）。神が夫に与えられたかしらとしての地位を、いかなる理由をもってしても、侵したり、争ったりしてはなりません。夫に呪いや恥をもたらすのではなく、祝福をもたらす者となることは大切なことです（箴言 12：4、31：10-12）。また、夫を愛し、彼の最良の友（励まし、助言を与え、間違いを指摘する信頼できる腹心の友）となることは、神が喜ばれる妻の姿です。

慎み深く、貞潔、優しく、柔和、穏やかな人で、家事に励み、旅人を良くもてなし、困っている人を助け、そして、神の前に正しいことを恐れずに行うことが妻に与えられた責任です（テトス 2：5、箴言 31：20、25、26、1ペテロ 3：4、6、1テモテ 5：10）。家庭が夫にとって、また、子どもたちにとって心から憩える所となるように、妻が努力することによって、神のすばらしさが現されるのです。

C. 「父として」

古くからのことわざに「父親になることは易しいが、父親であることは難しい」といわれています。良い父親となるためには、父親の務めをしっかりと知ることが必要です。父親に与えられた責任は、子どもたちを教え導くことです。神から託された子どもたちが、「神の前に正しく生活する」ように、また、「自分にとっての最高の喜びは神を喜ばせることである」と、心から信じて生きるようにと教え導くのです。そのためには次のことを実践することです。

(1) 自らが模範を示すこと

父親は、「聖さ」「信仰」「愛（神また妻に対して）」、「ことば」「態度（神を畏れる者としてどのように振る舞い、社会での責任を果たしているか?）」、「伝道」「希望（キリストの再臨に対する）」、「祈り」において、子どもたちの模範となるという責任があります。その模範を通して、子どもたちは神に喜ばれる生き方を学ぶのです。

(2) 正しい目標をもって訓練する

子どもたちを育てる動機が、自分が誉められたり、羨まれたりするためであってはなりません。子どもたちが神に喜ばれる者、また、知恵ある者、すなわち、常に、みことばに聞き従う者となるようにという目標をもって訓練するのです。子どもは神から託されたものです。主が託してくださった目的をしっかりと覚え続けることが必要です。

(3) 子どもたちのためにとりなしの祈りを続ける

良き模範と教えを通して、子どもを主の目的に沿って導きたいと願っていながらも、それがいかに難しいことかを私たちは知っています。私たちは、人間の心を変えることのおできになる唯一の神に、子どものことを祈ることが必要です。この働きがいかに大切であるかを私たちはもっと知ることが必要です。

自分は「親なのだから」ということで、「自分の好きなように」、また、「気の向いたときだけ教え導く」というようなことでは、かえって、子どもの心に反発をもたらします（エペソ6：4）。自分が良き模範として変えられ続けることを祈り、また、神の知恵とあわれみによって子どもを導くことを忘れてはなりません。

D. 「母として」

ユダヤの古いことわざに、「神がすべてのところにおられないので、神は母を造られた」といわれるように、母の務めは大切です。主によって与えられている責任をしっかりと果たさなければなりません。しかし、務め以上に大切なことは、その人が真にどのような人であるか、すなわち、その人の内側、心の態度なのです。なぜなら、心の態度が正しくない母親には、神から与えられている責任を果たすことが不可能だからです。

母親は次のような人であることです。

(1) 神を畏れる者

神を畏れる人は常に、神の臨在を覚えて生きる人です。これは、人目に付くこと、たとえば、服装、態度、振る舞いなど、また、そうでないことでも、常に、人ではなく神の目を意識することを意味します。神がどのようなお方であるかを正しく理解し、その信念に基づいて行動するのが母の特徴です。

(2) みことばを学ぶ者

神を畏れる者となるためには、神がどのようなお方であるかを正しく知ることが必要です。そして、そのような人になるためには、みことばの学びが必要です。みことばの教えを知らなくては、子どもにみことばを教える責任を果たすことができません。

(3) みことばを实践する者

みことばを学ぶだけでなく、その教えに率先して従うことが大切です。自らの言動が一致していることによって、教えに説得力をもたせることができます。もし、一致していなければ、子どもは偽善者だとして、その教えに耳を傾けることをしないでしよう。

母親が子どもに与える影響は大きなものです。そのため、子育て中は特に、母親は子どもとの時間をしっかりと取ることが必要です。子どもとの多くの時間を通して、母親は子どもを教え育てるのです。また、自らの信仰、愛、聖さにおいて、信仰者として成長し、自らが神を喜ばせることを最大の喜びとして生きるなら、神から託された子どもたちにすばらしい影響を与えることができます。

E. 「子として」

子どもたちは、愛と尊敬をもって両親に従うようにとみことばは教えます。子どもは愛と尊敬をもって、喜んで親に従う責任が神から与えられています。子どもは、主に従うように親に従う必要があります。そのように、子どもが親を愛し従うなら、神の祝福があるとみことばは約束しています（エペソ 6：1－3）。ただし、神に逆らうことを行うようにと命令された場合を除きます。

F. 「祖父母として」

まず、自らの霊的成長に励むことが必要です。そして、巣立って新しい家庭を築いた子どもたちの生活に、これまでと同じように干渉したり、介入したりすることは問題です。決して、二人の間に入り込まないようにしなければなりません。子どもたちが助けを求めに来た場合は、神にあって、彼らが正しい選択ができるように助言を与えてあげるべきです。彼らが神の栄光を現す家庭を築いていけるように、とりなしの祈りをささげ続けることです。

II. 「教会における責任」

A. 「集会に対する責任と態度」

1. 主日礼拝

神は、私たちキリスト者を真の礼拝者とするために救われました。そのため、私たちは日々、神を畏れながら、感謝と賛美をささげ続けることが大切です。しかし、このような個人の礼拝とともに、他の教会員とともに、毎週日曜日に行う公の礼拝があります。この礼拝は、私たち救われた者たちが心一つにして礼拝をささげることのできる、週一回の機会です。この日、一週間の務めから解放された私たちは、自分の罪のために十字架で死んでくださり、そして、約束通りにからだをもってよみがえられた主イエス・キリストに、自らの感謝と賛美を、つまり、礼拝を、愛する教会員とともにささげるために集まります。また、過

ぎ去った一週間の間、主に喜ばれる歩みを通して、日々礼拝をささげることが可能にしてください。主を、信仰者とともに誉め称えるのです。こうして、私たちが神に喜ばれる礼拝をささげるとき、神はその礼拝を用いてご自身の栄光を現されます。神が私たちのうちに働かれていることがはっきりと示され、そのことを通して、信者同志の信仰が強められ、そして、未信者の心に神への恐れが生じます。このように、主日礼拝はクリスチャンにとって大切な時間です。

それゆえ、主日礼拝は出席しても、また、しなくても、どちらでもよいという性質のものではありません。万難を排して出席することが大切です。もちろん、主日礼拝に出席さえしていれば、週の残りの日はどのように過ごそうと構わないというわけではありません。日々、礼拝者として生き続けることが大切です。そして、私たちの主が復活されたことを記念して集まるこの主日礼拝に、積極的に、また、どんな犠牲を払っても出席するのだという献身的な心の態度が、今、すべてのクリスチャンに必要です。

(1) 主日礼拝への備え

神を礼拝する者は聖くなければなりません。そのためには、自らの心を常に吟味して、罪を告白し、聖められることが必要です。また、礼拝者は、何かをいただくためにではなく、神への感謝のいけにえをささげるために出席するのだということを、決して忘れてはなりません。その一つは「賛美」です。あなたが心から神への賛美をささげるために、その日の礼拝であなたが会衆とともにささげる賛美の歌詞を、前もって読み、考え、心からささげるために備えておくことが必要です。

二つ目は「献金」です。あなたの心からの感謝を具体的に形で表すために、礼拝献金を前もって用意しておくことが必要です。その金額は、あなたの心からの感謝の表れですから、各自が神の前に祈りつつ決めることが大切です。

三つ目は「祈り」です。神を覚え、そのお方を崇め、感謝を表しながら礼拝に出席するのです。

メッセージに対しても、それを通してより深く神を、また、そのみこころを知ることで、もっと心からの礼拝をささげることができるようになること、みことばを通して、聖霊が私たちのうちに働き、私たちをよりキリストに似た者へと変えてくださることを期待しながら出席します。

(2) 主日礼拝への出席

礼拝のために心を静め整えるためには時間が必要です。そのためには、余裕をもって教会に来ることです。仕事や学校以上に、礼拝に遅れることを私たちは避けなければなりません。もし、私たちがこの世界の重要人物に会えるとすれば、その予定時刻に遅れないばかりか、余裕をもって行動することでしょう。なぜ、そのような思いが神に対してはないのでしょうか？また、心だけでなく、からだを整えるためには、前夜ゆっくりと寝て、十分な休息を取ることが必要です。心身ともに十分な備えをして礼拝に臨むように心掛けなければなりません。

(3) 主日礼拝において

普段の生活においても、また、礼拝においても、私たちは自分のことより、まず人のことを考えていなければなりません。初めて教会に来られた方や、まだ慣れておられない方、聖書を開くことにまだ不慣れな方、助けが必要な方、また、話し相手や知人が余りいない

ために独りぼっちでおられる方などを助け、歓迎し、話しかけることを常に心掛けていることです。これこそ「キリストの愛の実践」です。教会に来られた方を、精一杯歓迎しましょう。また、できるだけ、家族揃って礼拝をするように心掛けましょう。子どもたちにとっても、親とともに礼拝できるすばらしい機会です。確かに、親子が揃って礼拝をするためには、親子ともに訓練が必要です。しかし、これは神に向かう親の真剣な態度を通して、子どもたちに神を畏れることを教える大切な、そして、すばらしい機会です。また、他の信者は彼らを励まし、助け、そして、祈りで支えましょう。

(4) 主日礼拝後

信者の霊的成長のためには、礼拝中はもちろん、礼拝後の時間がとても大切です。このときは、みことばを聞かれた未信者の方々への個人伝道に最適の時間です。その日の礼拝に出席された未信者の方の救いのために、各信者はその場でまず祈るようにしてください。また、信者がその日のメッセージで教えられたことを話し合い、祈り合ったりして、互いの徳を高めることができます。また、食事をともにしながら、主のすばらしさを証し合い、励まし合うことができます。この大切な時間を、世的な話で時間を無駄に使わないように心掛けましょう。礼拝堂では、個人伝道、また、信仰の大切な話がされているかもしれません。人の話の邪魔になるような大声で話をすることは避けなければなりません。周りに対する配慮が必要です。また、これらは礼拝以外の集会でも同様のことが言えます。

2. 祈祷会

祈祷会は教会の成長と活動の原動力です。クリスチャンが集まってともに祈る祈祷会は、教会の働きを進める上で大切な集会です。初代教会においても祈りは重要な役割を果たし、教会のあらゆる活動も祈りによって始められました。教会史において神が用いられた教会は、個人においても、また、全体においても、祈りを重んじた教会でした。私たちが教会の働きのため、求道者のために祈りましょう。日々の生活だけでなく、一週間の予定の中に、祈祷会の日を入れ、積極的に参加しましょう。

3. 聖書の学び会

聖書の学び会は、みことばを「一方的に聞く」ときではありません。みことばをより深く理解し、適応を具体的に学ぶ機会です。みことばをいくら聞いても、それですべてが自分のものになったとは言えません。自分のものとしてしっかりと理解し、実践するためには、みことばを日々反芻、瞑想し続けること、また、質疑応答のときが必要です。礼拝メッセージに対する質問や、その答えを、また、みことばの適用を、参加者がいっしょになって考えます。みことばのすばらしさをもっと知るためにも、学び会は大切です。熱心に学ぶ者となりましょう。

4. 家庭集会

家庭集会は、「教会の敷居が高いのでちょっと…」と言って教会に来ることを躊躇されている方たちが、気軽に参加していただける集会です。家庭集会は、これまで伝道、また、教化に大いに用いられて来ました。教会員が、主を崇めること、主をより深く知ること、そのすばらしさを称え、証し合うこと、また、主に対してともに忠実であり続けるために励まし

合うことなどを目的として集まるなら、それは主の栄光が現されるすばらしい家庭集会となることでしょう。そのような主が喜ばれ用いられる家庭集会がもっと増やされていくことはすばらしいことです。そのためには、各教会員が家庭を開放したり、集まるように励まし、また、呼びかけたりして、この働きに積極的に参加することが必要です。

5. その他

教会には「特別集会」、「訓練会」、「キャンプ」、「男性会」、「女性会」、「青年会」などの集会があります。これらの集会は、神の恵みをいただき、私たちの信仰を強める機会となるとともに、聖徒同志のよき交わりの機会ともなります。また、新来会者や求道中の人々に対するすばらしい伝道の機会ともなります。この世の生活に忙しくなり過ぎないようにし、教会の集会には熱心に、また、神の祝福を期待しながら出席しましょう。また、そのような集会に積極的に新しい人をお誘いしましょう。

B. 「奉仕に対する責任と態度」

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。」（I ペテロ 4：10－11）。

クリスチャンは、それぞれに「御霊の賜物（*前述 P.21）」が与えられています。各自の賜物を生かして、それぞれの成長のために仕え合うことが奉仕です。精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主にあって、また、主のために為す心からの行為です。教会は主のもので、教会の存在の理由と目的は、主イエス・キリストが伝えられ、主の御名が崇められて、神の栄光が現されることにあります。このために、クリスチャンは喜んで教会の内外で奉仕をするのです。

教会の中で自分には奉仕はできないと初めから思い込んでいる方々がいます。しかし、私たちが奉仕の働きをするために、主は霊的賜物を全キリスト者に例外なく与えられました。あなたは主によって大いに用いられます。必要なことは、あなたが「主よ、用いてください」とまず願うことです。そして、主があなたの心に与えてくださった思いを実践に移すことです。奉仕は、ある一部の人たちだけのものではありません。救われたすべての人たちに、神から与えられた特権です。教会員全員が働き人であることを自覚して、主のためにすべてのことを進んで為してまいりましょう。

III. 「社会における責任」

1. 「国家に対する責任」

パウロは、ローマ書の中で、私たちは「上に立つ権威に従う」ことを教えています。それは、彼らが主によって立てられたからです（ローマ 13：1）。また、私たちは国が定めた法を重んじて、それらに従わなければなりません。納めるべき税は納めなければなりません。この社会に

生きる者として、人から責められるところがないように、善を行い続けることが大切です（ローマ13：1-7、テトス3：1）。

確かに、主が喜ばれることばかりが国会で決議されるわけではありません。しかし、私たちクリスチャンはデモや抗議に時間を費やすよりも、国家のため、その立てられたリーダーたちのことを主の前に執り成しの祈りをささげながら、主の栄光を現す者として正しく歩み続けることです。

2. 「勤めに対する責任」

主が遣わして下さった職場はクリスチャンにとって伝道場です。主の救いに与っていない多くの人々の前で、主の偉大さ、救われることのすばらしさを証するのです。主は私たちクリスチャンのことを地の塩、また、世の光と呼ばれました。それは周りの人々に対するクリスチャンたちに与えられた大切な責任を明確にされたのです。職場で一番信頼される人になることです。悪と妥協することなく、どんなときでも、聖さ、正しさを追い求めながら、主の良き知らせを伝えることに励むことです。

3. 「地域に対する責任」

どこにいても、だれに対しても、私たちの隣人に対する宣教の責任は変わりません。良き証をするためには、まず、その隣人や地域のために祈り始めることです。私たちが主の前を正しく歩み続けているなら、必ず、主の証は為されています。そして、「あなたがたのうちにある希望について説明を求め人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」とペテロは教えました（1ペテロ3：15）。主イエス・キリストの香を放つ者として、主の栄光のために歩み続けていくことです。

結 婚

家庭は、神が私たちに祝福を与えるために備えられた最も基本的な生活の場です。ですから、私たちは、神の祝福を十分に味わえるような家庭を築いてゆかねばなりません。

結婚は、人間の願いや社会に必要なものとして、人の手によって定められたしきたりや決まりではありません。それは、神が人を男と女とに創造されて以来、人に祝福を与えるために定められたものなのです。したがって、自分の好みや計画を中心に結婚を考えることは誤りです。神の御前で、自分の結婚についての目的や動機などが、神に喜ばれるものであるかどうかを吟味することが大切です。また、婚前交渉や、妻、夫以外の異性に心移すことなどは、神のみこころに反するもので、神からの祝福を受けることはできません。

1. 「結婚の目的」

主なる神は、「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」（創世記2：18）と言われ、女を創造されました。主は男女を目的をもって造

られました。男はリーダーとして家族の物質的、また、霊的必要性を満たすという責任があり、女にはその男性の助け手としての責任があります。男には愛をもって家族を導くこと、また、女にはそのリーダーシップに自ら喜んで従うことが命じられています(エペソ5 :22-33を参照)。

サタンは、それぞれが主の教えに従うことなく、自分勝手な考えによって歩むようにと誘惑し、家庭を破壊しようとします。ですから、しっかりとその目的を知り、みことばの教えにお互いが服従して、神の栄光が現される家庭を築くことが大切です。

結婚には、第一に「一人の男と一人の女が一体となる」という目的があります。「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」(創世記2 :24)。もはや、二人ではなく、精神的にも肉体的にも一つとなるのです。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」(マタイ19 :4-6)。

また、第二に「男女が、互いによき配偶者となる」ことがあります。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」(創世記2 :18)と、そこには、相互の愛と服従が要求されます(エペソ5 :22-33)。

そして、第三は「子孫を残すこと」です。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」(創世記1 :28)、これは、神の祝福に満ちた聖なる委託です。

2. 「結婚への備え」

神の祝福を受けるにふさわしい家庭を築くためには、良い備えが必要です。神が喜ばれる家庭を築くためには、神がお喜びになる信仰者として成長することが不可欠です。結婚のためだけでなく、クリスチャンとして、日々の生活においてみことばを学び、その実践によって成長することが大切です。みことばの教えに従って家族を立て上げていくためには、聖書の教えをしっかりと正しく知っておくことが大切です。あらゆる問題の中で、クリスチャンとして正しい判断が下せるように備えることが大切です。

また、お互いに自らのからだを聖く保つことも必要です。結婚まで性的聖さを保つことは、フリーセックスや不倫など、結婚を軽んじる現代の社会風潮の中では蔑まれることでしょう。しかし、それが主の命令であることを知っています。私たちは「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行う者とをさばかれるからです。」(ヘブル13 :4)のみことばを心にしっかりと刻むことが大切です。

3. 「結婚相手」

結婚相手を選ぶときに規準として最も大切なことは、聖書が明らかにしている通り、お互いが信仰の告白をしているクリスチャンであるということです(エペソ5 :22-33、IIコリント6 :14-16)。どんなにあなたの理想に近い素晴らしい人であっても、未信者を結婚相手を選ぶことは神のみこころに反することです。人生や家庭の目的や目標、また、価値観などに一致を得ることは困難です。神に喜ばれることを願う人と、サタンに喜ばれることを願う人が、神の栄光を現すためにともに生きることは不可能です。独身のときよりも熱心に、また、忠実に神に仕える生活を過ごすこと、また、神に喜ばれる家庭を築くことなど不可能なことです。

クリスチャン同志であるべきという結婚に関する神の教えに逆らうことは、どんな理由があるにせよ、神の祝福の制度を自ら否定することであって、その不従順の苦い実を生涯自分の責任において刈り取ることとなります。神からの祝福は、神に従う者に約束されているのです。

家族から、未信者の方とのお見合いを勧められたときは、自分の信仰と主が必要を与えることと約束して下さっていることを家族に伝えることです。また、職場などでお付き合いを求められたときは、それを承諾するのではなく、まず、その人に福音を伝えることです。どうして自分にとって主イエスが最も大切であるのかを伝えることです。また、その人を教会に誘うことも良いでしょう。いずれにせよ、その人のことを長老に伝え、祈りや助言を得ながら、相手が同じ信仰に立つ者となるまでは、結婚への最終的判断を下さないようにすべきです。

この世は、結婚が幸せをもたらすと吹聴します。また、クリスチャンの男性が少ないことなどを理由に挙げて、みこころに反する選択も仕方のないこと、例外も存在するはずだと惑わします。本当の幸せは主だけが与えることのできるものです。アダムとエバが罪を犯すために、みことばへの疑いを抱かせたサタンは、今も同じ手法でもってクリスチャンたちに働き続けています。サタンの惑わしに決して騙されてはなりません。どんなときでも、主は最善を為されるという、主のみことばに信頼を置いて歩みましょう。もし、主が結婚へと導いてくださるのであれば、主は最高の相手を備えてくださいます。そのために必要なのは忍耐です。自分の愚かな判断によって主の祝福を逃さないようにしましょう。

結婚について、自分で祈るだけでなく、長老にも相談して祈りを求めることは大切です。

4. 「交際」

恋愛中は、どうしても感情的になりがちです。しかし、どんなときでも感情に流されることなく、神の栄光を現すために生きているということをいつも覚え続けることが必要です。その交際が主に喜ばれるものとなるためには、常に、主に喜ばれることを選択することが重要です。そのためには、二人の関係が性的に聖いものでなければなりません。婚前交渉はこの世では受け入れられても、神の前ではそうではありません。性は神が夫婦に与えてくださった祝福です。未婚、既婚を問わず、夫婦以外の性関係は罪です。性的誘惑から自らを守る最善の方法の一つは、相手のからだに極力触れないことです。私たちクリスチャンは自分以上に人を愛する者です。自分の性的願望を満たすことだけを考える人は、相手よりも自分を愛しているのです。相手を愛し尊重するゆえに、相手の聖さを守ろうとする人こそ、相手を愛し尊重している人なのです。これこそ、主の教える愛を実践している人です。

5. 「結婚準備」

A. 婚約

「この人こそが主が備えてくださった生涯の伴侶である」との確信が主にある男女に与えられたなら、長老に報告し、適当なときに婚約式を行います。婚約はあくまでも結婚の約束を神と証人たちの前に立てるものであって、結婚と混同してはなりません。婚約中の二人は、交際中と同様に、聖さを保ち、神に喜ばれることを第一に考えて歩むことです。また、二人が教会の祝福となることを祈りながら、言動に注意することが必要です。また、決められた結婚のためのカウンセリングを受けて、結婚への備えを進めていきます。

B. 結婚式

結婚式は、神と教会との前で結婚の誓約を交わすものです。また、神を崇めて礼拝をささげるときでもあります。そのために何が最善かを長老たちと話し合っただけで決めることが大切です。披露宴も、列席された方への感謝の場ですが、結婚後の生活に支障のないように、内容を考えることが必要です。

6. 「離婚」

「『わたしは、離婚を憎む』とイスラエルの神、【主】は仰せられる。」（マラキ2：16）と教えるように、神は離婚を禁じています。また、パウロも「次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。——もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい——また夫は妻を離別してはいけません。」（Iコリント7：10-11）と教えています。

しかしながら、聖書が離婚を容認しているケースがあります。伴侶が不貞（姦淫）を犯した場合です。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。」（マタイ5：32）。しかし、たとえこのような場合でも、主は離婚するのではなく、和解することを勧めています。

もう一つのケースは、夫婦のうち、未信の方が信者である伴侶を捨てて去ってしまった場合です（Iコリント7：15）。未信の方が家庭を捨ててしまった場合や、また、結婚生活を始めた未信の夫婦のどちらかが救いに与り、その信仰を快く思わない未信の方から離婚を申し出られた場合などもこれに該当します。しかし、離婚を迫られない場合には、信者の方から離婚を申し出てはなりません（Iコリント7：12-14）。

結婚生活では、すべてが順風満帆というわけにはいきません。しかし、様々な問題が生じたときこそ、二人を結び合わせてくださった神をとともに見上げ、祈り合い、聖書的に正しい解決の方向に向かう努力をすることが大切です。

離婚は決して本当の解決にはなりません。信仰によってそれを乗り越え、相手を許し、最終的に神の栄光が現されるようにしましょう。「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」（マタイ19：6）。

7. 「再婚」

再婚について、聖書は次のように語っています。「妻は夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にあつてのみ、そうなのです。」（ローマ7：1-3、Iコリント7：39、）。すなわち、配偶者と死別した人については、再婚を認めているのです。聖書の中に登場する信仰者ルツも夫と死別し、その後、再婚をしました。

また、前記（離婚の項）の聖書が容認する理由で離婚に至った場合は、再婚が認められています。しかし、聖書が容認する理由以外で離婚をした場合は、その人の再婚を聖書は認めていません。その場合の再婚は、姦淫の罪を犯すことになるかと教えています。「もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい——」（マタイ19：9、Iコリント7：10-11）。

これまでは、信者の離婚、再婚についての聖書の教えを見て来ました。では、救われる前に離婚した人の再婚についてはどうでしょう。聖書は、救いによってすべての罪が赦されることを教えています。離婚の罪もそれに含まれます。

救われた後、離婚したかつての伴侶との関係が修復できない場合、たとえば、その人がすでに死んでしまっている場合、再婚してしまっている場合、また、未信の場合は、信者との再婚が認められます（Ⅰコリント7：39、Ⅱコリント6：14）。

独 身

すべての人が結婚するように定められているわけではありません。独身で一生を過ごすように定められている人もあり、また、主に仕えるために自ら進んで独身の道を選ぶ人もあります（マタイ19：12）。結婚するかしないかではなく、主のみこころに従うことが幸せを得る唯一の方法です。あなたのことを愛しておられる主を信頼し、主の最善が為されることを信じて歩むことです。あなたの責任は、自分の欲しいもの、願っているものを手に入れるために奔走することではなく、日々、主のみこころに従い、主の栄光を現し続けることです。

やもめ

パウロは、やもめに関する教えを与えています（Ⅰテモテ5：3-16）。その中で彼は、やもめの名簿に載せるべき条件を次のように教えています。「やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、良い行いによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわぎに務め励んだ人としなさい。」（Ⅰテモテ5：9-10）。こういったやもめの世話をすることをパウロは教会に命じています（Ⅰテモテ5：16）。

しかし、また、彼らに身内がいる場合、その子どもか孫、また、家族が彼らの世話をするようにと教えています（Ⅰテモテ5：4、8、16）。

やもめになってもあなたの主への責任は変わりません。神の偉大さと、主イエスのすばらしい救いを称えながら、その福音を宣べ伝え続けるのです。主にお会いするまで、主の栄光のために歩み続けることが大切です。

教会生活篇

1. バプテスマとは？

(1) バプテスマの意味

バプテスマとは、神がキリスト者のうちに成してくださった恵みのみわざを、人々の前で公にする行為です。すなわち、神によって救われたことを人々の前で証することがバプテスマであり、救われるための手段、行為ではありません。「水の中に浸ること」は、神に逆らい罪人であったかつての自分が、キリストとともに死んで葬られたことを、また、「水の中から上げられること」は、その自分がキリストとともに死よりよみがえったことを象徴しています。

また、バプテスマは、神に対する従順の証でもあります。神は、イエス・キリストを信じ救われた人々に、バプテスマを受けるようにと命じておられます。それは、①イエス自身が受けられた（マタイ3：13－15）、②大命令の中に含まれている（マタイ28：19－20）、③初代教会が行った（使徒の働き2：38、41、8：12－13、36、38、9：18、10：47－48、16：15、33、18：8、19：5）などによって明らかです。

それゆえに、キリストを主として受け入れ、従っていくことを決心した私たちキリスト者にとって、バプテスマとは、受けても受けなくても良いというものではなく、従順の証です。

(2) バプテスマを受ける備え

この浜寺聖書教会でバプテスマを受けた人は、入会式を経て、当教会員となります。そういうわけですから、自分の母教会となるこの浜寺聖書教会の教理、また、教会観などを、バプテスマ準備クラスでしっかりと学ぶことが必要です。そして、同意、納得した上で、バプテスマを受けます。

(3) バプテスマを受けてから

バプテスマは、信仰の終着点ではありません。ただの通過点です。私たちキリスト者は、この世の歩みを終えて天国へと導かれるまで、主に従順であることが要求されています。バプテスマだけでなく、主の忠実なしもべとして歩み続けましょう。そして、益々神の栄光のためにすべてを為し、自らに与えられた霊的賜物を用いて教会で奉仕し、兄弟姉妹の霊的成長のため、また、福音宣教に率先して励んでまいりましょう。

2. 聖餐式の意義

聖餐のパンと杯（ぶどうジュース）は、主イエスの十字架での死を象徴しています。パンは、主の引き裂かれたみからだを、杯は流された血潮を象徴的に示しています（I コリント 11：23－28）。しかし、聖餐式の意義は、パンと杯をいただくことではなく、主の前に自分の信仰を吟味することにあります（I コリント 11：28）。いのちという余りにも大きな犠牲を払ってくださった主に対して、自分の生活は主の前にふさわしいものかどうかを、各信仰者が吟味をするのです。

もちろん、主の十字架を覚えて、自らの信仰を吟味することは、信仰者が日々行うべきことです。しかし、教会員が一堂に会して聖餐式を行うときは、主の贖いのみわざを覚えて、一同で感謝をささげ、主への決心を新たにすることがあります。決して軽んじてはならないことです。

3. 献金について

(1) 献金の意味

神は私たちの救いのために、ご自分の御子を惜しまずに与えてくださいました。救われ、礼拝者と変えられた私たちは、この神への感謝を様々な方法で表そうとします。その一つが献金です。献金は、神の恵みに対する感謝の具体的な表現です。そのため、献金をささげることができるのは、主によって救われたクリスチャンだけです。

(2) 献金の心

献金を義務や責任として考えるのは誤りです。献金がクリスチャンの神への感謝である以上、心から喜んで自発的に、また、犠牲的にささげることが主はお喜びになります（II コリント 9：7）。神の関心は額ではなく、ささげるクリスチャンの心です（ルカ 21：1－4）。

献金は決して強いられてするものではありません。この原則は旧約時代も新約時代も同じです（II コリント 9：7、申命記 16：10、17）。献金は、各自の収入に応じて、また、持っている程度に応じてささげます（I コリント 16：2、II コリント 8：2－12）。集会献金は、あらかじめ心づもりをして準備しておきます（I コリント 16：1－2）。

(3) 献金の種類

・月定献金

教会員が、毎月、各自が決めた金額をささげるのがこの献金です。旧約の時代は、人々は収入の十分の一を神にささげました。ささげなかった民に対して神は「神のものを盗んでいる」と言われました（マラキ3：8）。恵みの時代である新約時代に生きている私たちは、旧約の人々以上に、信仰と喜びと犠牲をもってささげることが大切です。

・礼拝献金

主日礼拝において、礼拝行為の一部として献金をささげます。そのためには、あらかじめ準備しておくことが大切です（Iコリント16：1-2）。

・感謝献金

主から特別な祝福をいただいたときに行うのがこの献金です。たとえば、バプテスマ、婚約、結婚、誕生、献児式、入学、卒業、病気、全快、新築、ボーナス、退職などのときに、感謝と記念の思いを込めて行います。

・指定献金

教会の特別な計画や働き、また、必要に対して、それらを具体的に指定して行うのがこの献金です。

・特別献金

教会の、予期せぬ出来事や突然に生じた必要に対してささげる献金です。

4. 献児式について

これは信仰者の両親が、神の恵みによって託された子どもを神におささげし、神を愛し従う者となるように、みことばの教えに従って養い育てることを神と教会とに誓約する機会です。

サムエルの母ハンナが幼子サムエルをささげたこと（Iサムエル1：20、28）、また、ヨセフとマリヤも幼子イエスをささげたことが記されています（ルカ2：22、24）。

子どもは親の私物ではありません。主がその親を選んで託してくださったものです。ですから、親は託された主の目的をしっかりと覚え、その目的に沿って子どもを育てていかなければなりません。難しい子育てを始めるにあたり、まず、その子を主におささげし、多くの祈りに支えられながら、その務めを忠実にを行うようにとお勧めします。

献児式には、年齢の決まりはありません。希望される方は長老会へ申し出てください。

5. 葬儀について

葬儀に関しては、次の手順に従って行動してください。

家族が召された場合は、直ちに、教会、もしくは、長老に連絡を入れてください。葬儀社への連絡は教会が行いますので、葬儀社の到着をその場所で待っていてください。

それが病院でしたら、「葬儀社がこちらに向かっています」ということを病院側に伝えておいてください。遺体処理は病院に任せますが、搬送に関しては葬儀社が行います。もし、可能であるなら、葬儀社が到着する前に、着せたい衣服があればそれを取りに帰ってください。その際、スタンプ印ではなく、印肉を使う印鑑と、遺影に使いたい写真があれば、それも持って来てください。

召されたのが自宅であった場合は、葬儀社や長老が到着するまで待っていてください。

葬儀社、また長老が到着してから、遺体の搬送先を決定します。そして、搬送後に、葬儀の詳細について葬儀社と打合せを行います。

- ・遺族が準備するもの：
 - (1) 着せたい衣服（無ければかまいません）
 - (2) 印肉を使う印鑑
 - (3) 遺影のための写真

付録（1） 救い

救われるためには、どうすればよいのか？

私たちの語る救いのメッセージは次の通りです。

1. 「本当の神さまとはどのようなお方か」について語る

(1) 神とは創造主である

過去にどれほどの功績があろうと、いかに秀でた偉人であろうと、人は死んだからといって神になるということは絶対にありません。また、私たちの周りに存在する超自然的なあらゆる生き物も、造られたものであって神ではありません。真の神とは、私たち人間、自然界、また、宇宙のすべてのものをお造りになった創造主です（創世記1：1、ヨハネ1：3、イザヤ44：9－17、45：18、使徒17：24、29、ローマ1：20－23）。

(2) 神とは全く聖いお方

神は、私たちのように人を欺いたり、偽りを言ったりするようなお方ではありません。罪とは全く無縁な神は、そのようなことを行ったり、心に抱くことさえありません。このお方は、罪を犯したことの無い天使たちにさえ、畏れられている聖いお方です。このお方は、ご自身のご性質に反するいかなる罪をもさばかずに見過ごすことなどできません（レビ11：44－45、ヨシュア24：19、Iサムエル2：2、6：20、Iペテロ1：16、出エジプト20：5）。

2. 「神の前に私たちはどのようなものか」について語る

(1) 罪を犯した罪人

さて、私たちや万物をお造りになった神は、何の目的でこれらを創造されたのでしょうか？それは、この偉大なる神の栄光、つまり、そのすばらしさを明らかにするためにです。その目的を果たすためには、すべての被造物同様に、私たちもこの神を愛し、その命令のすべてに逆らうことなく、喜んで服従することが必要です。しかし、現実はどうでしょう？この神を信じないだけでなく、このお方が私たちに望んでおられる聖い正しい生き方を無視して、自分勝手に快樂のままに生きることを選択して歩んでいます。この神を信じず、命令に逆らった生き方こそ、神に対する罪なのです（ローマ1：29－31、3：10－12、23）。

(2) 神によってさばかれる運命にある罪人

神に対して罪を犯している人の罪を、神は見逃さずに必ずさばかれます。そのさばきは公正で、だれ一人としてそのさばきの前で言い逃れをすることはできません。神は私たちが実際に行なったことだけでなく、心の中で抱いた不純な思いに至るまで、すべての罪を確実にさばかれます。そして、そのさばきの結果、その人は地獄ではっきりと意識を持ったまま永遠に苦しみを受けるのです（ヘブル4：13、ルカ16：19－31、マタイ25：46、使徒17：31）。

(3) 自分で自分を救えない罪人

私たちは、自分のどのような努力や善行をもってしても、決して、罪を犯さない完全な聖い者にはなれないし、そのさばきから逃れることはできません。なぜなら、私たちが行うどのような努力も善行も、決して完全な神を満足させることのできる完全なものではないからです。どんなに決心しても、その意志を貫くために自らを鍛えても、心の中に潜む罪の力を押さえることはできません。この事実を、罪のさばきと、その力から逃れる方法が私たちのうちにはないことを教えます。救いに関して、私たちは希望のない存在です（イザヤ64：6、ローマ3：20）。

3. 「神の恵みによって救われる」ことについて語る

(1) 救い主イエス

人にはできないことを神はしてくださいました。神は私たちをその罪より、また、そのさばきより救い出すために救い主をこの世に送ってくださいました。それがイエス・キリストです。本来、私たちが受けなければならない罪のさばきを、あの十字架で、罪のない神のひとり子が代わって受けて死んでくださいました。この身代わりの死のゆえに、私たちの罪は完全に赦されるのです。あのイエスの十字架での身代わりの死は、私たちのどんな罪をも赦すのに余りあるものです。

(2) 信仰による救い

もし、あなたが自分は神に逆らう罪人であること、あなたは永遠のさばきに向かっていること、あなたは自分を救うためには何もできないこと、あなたの罪が赦されるのは、あなたの身代わりとなって十字架で死に、約束通りに三日目によみがえられたイエス・キリストによるこ

とだけであること、あなたがこれらのことを心から認め、救われることを心から望むなら、罪を悔い改めて、イエス・キリストをあなたの神、救い主として信じ受け入れることです。

これまでの神に逆らう生き方を止め、真の神であり、すべての主であり、唯一の救い主であるイエスを、あなたが信じ、このお方に従っていく決心をするなら、その信仰があなたを救います（ヨハネ3：16、ローマ10：8－13、Iコリント15：1－4）。決して、あなたの行う良い行いがあなたを救うのではありません。神に逆らって生きて来た私たち罪人が、これまでの生き方を止めて、これからは神に従って生きようと方向を転換するのです。この決心によって、私たちが今後、罪を全く犯さない者へと変えられるのではありません。しかし、イエスの身代わりの死ゆえに、それを信じる者の罪が完全に、また、永遠に赦されるのです。

付録（2） 聖書の学び方

I. 聖書研究への手引き

1. 目標

自分で神のみことばの真理を発見する。

2. 聖書研究への態度

正しい態度

- (1) 積極的態度 : 私は聖書について学びたい。確かに、学びの方法を身に付けることは難しいし、理解できないこともあるだろう。しかし、聖霊の助けによってできると信じる。
- (2) 受け入れる態度 : 神は神ご自身と、神の真実を私に明らかにされるために、心を開くようにと私に求めておられる。私はすべてを理解できなくても良い。
- (3) 期待する態度 : 私がみことばを学ぶのは、神に語りかけていただくためである。私が学び、そして、祈るとき、みことばの中にあるメッセージが紐解かれていくと確信している。
- (4) 忠実な態度 : 私が喜んでエネルギーをつぎ込み、また、学びにおいて鍛錬しなければ、聖書の学びから多くを期待できない。神はみことばの中に豊かな宝を隠しておられ、表面だけ学ぶ者は少しの報酬を、忠実に熱心に深くみことばを掘り下げて

学ぶ者は、豊かな宝を得ることができる。

間違った態度

- (1) 敗北的態度 : どうせ学んでも何も理解できないのだから、聖書を学びたくない。
- (2) 否定的態度 : 聖書をもっと良く学びたいが、私が発見したことが正しいことなのかどうか疑問だ。私は、自分の発見したことが間違っているかもしれないという不安のゆえに、人前で発言することを恐れている。
- (3) なまけの態度 : 多分、学べば今よりもっと理解できるだろうが、しかし、難しいし、また、おもしろくない。余り時間を費やしたくない。

3. 聖書研究の種類

適用重視型

みことばをすばやく読み、そして、それがどのように生活に適用されるのだろうかを考える。

注解書重視型

みことばを読み、直ちに、注解書を見る。注解書が教師である。

聖霊重視型

これが他と異なるのは、祈りと黙想にほとんどの学びのときを費やすことにある。みことばを読み、そして、真剣に学びもせず、ただ聖霊にみことばの内容や真理を示していただくように求める。

組織重視型 : 組織的学び

これは、みことばを秩序正しく、論理的に学ぶことである。これは、これまでの良いところだけを取り入れたものである。これは、聖書の学びだけでなく、その他の、たとえば、農業やパン作りにまで適用される。農夫も農作物を育てるに当たり、計画に従うし、また、パン屋もパン作りのために決まった手法を取る。

4. 聖書研究のための道具

- ・ 聖書
- ・ 他の訳（口語訳、文語訳など）、リビングバイブル
- ・ コンコルダンス
- ・ 国語辞典
- ・ 注解書、聖書辞典、聖書地図

これらは、地理・背景・その時代の文化、また、難解な箇所の意味を知る上で大切。注解書が最後に挙げられているのは、解釈の最後の手段に用いるため。

II. 聖書研究の手順

1. 観察する 著者が何と言っているかを正確に観察する。(テキストは何と	これは、聖書の学びで最も大切、そして、最初になされなければならない。 より注意深く、そして、徹底した観察をするならば、より
-----------------------------------------	------------------------------------------------------------------

言っているか)	深い学びができる。
2. 解釈 著者が何を書いたのかを客観的に解釈する。(テキストの意味は何か)	彼が言ったことの本当の意味は何であったのかを探る。著者の思い・態度・感情・目的を発見しようと試みる。
3. 要約する その箇所を中心的な考えを要約する。	観察した事実を要約した後に、その意味を考える。
4. 適用 示されたメッセージを自分に適用する。(このメッセージは私にとってどのような意味をもつか)	4番目に大切だから、4番目に書いてあるのではない。これは他の過程を経て出て来た実である。この適用は、成長する過程であり、他のすべての過程から生み出されるものである。
5. 実行する 自覚させられたこと。 教える。	だれかが「ただ聖書を勉強するのではなく、何かをきなさい」と言った。学びは、しばしば、ただ知的、感情的だけで現実化されていない。それは主が私たちに示されたことを、実際に行うことである。

Ⅲ. 観察すべき特別なこと

主要語 (キーワード)	最初に読むとき、主要語、すなわち、そのみことばの中で重要と思われることばを探す。 同じことばが繰り返されているかに目を留める。
忠告・訓戒・警告・約束	著者が与える訓戒、すなわち、忠告・勧告・警告、また、あなたに行うようにと勧めていることなどに注意する。また、約束や励ましにも注意。ヒントは、命令の動詞を探すこと。
理由 行ったことに対する結果	あなたが訓戒を探すとき、著者がその忠告に対して、いくつかの理由を与えていないかを見る。 または、原因と影響関係がないか — もし、あなたがこれをすれば、そのとき、これが起こる。しばしば警告とともに、それに伴う結果を与える。
対比・比較・例 (たとえ)	著者が用いる対比・比較の仕方に注意。 彼の考えを引き出すためのたとえ、比較は同類のもの組み合わせ。対比は、反対のもの組み合わせで、よく「しかし」という語で紹介されている。

繰り返し、そして、考えの進行	ことば、考え、主張の繰り返しに注意。 これは、しばしばその箇所における著者の目的を知るヒントである。物事や考えの列記によく注目すること、その物事を比較し、その順番に何か特別の意味があるのかを考える。考えがクライマックスへと進行しているだろうか？
質問	質問が用いられているところを探る。 それは、考えを紹介するため、一連の考えを要約するため、または、ただ単に思考にチャレンジするために用いられたのか？
重要な連結語 前置詞 接続詞	連結語は重要な考えや関係を明らかにするために大変重要である。 次のことに注意すべきである。 しかし : 対照を紹介する もし : 条件付きの節を紹介 ～のために、なぜなら、それゆえ、というのは、だから、 : 理由や結果を紹介 ～の中に、～の中へ、～とともに、 : 重要な連結語 するために : 目的を述べる
文法的構成 動詞、名詞、代名詞、 副詞、形容詞	文の文法的構成を知ることは重要です。 特に、動詞とその時制に注意、代名詞の用い方に、また、副詞、形容詞の使い方とその表現方法について注意すべき。
状況 強調した主張	文全般の調子を見る。 それらは、喜び・感謝・心配・謙遜・熱心・怒り・警告などの気分で特徴づけられる。 文の調子は著者が一つの考えから他のものに移るときに変化する。 著者の気分は、どのように読者を呼んでいるかによって、しばしば明らかにされる。 また、主張、語や語句を強調していることによって感情を表す。
文学的書式	常にみことばの文学的書式を見る。 それが説教、物語、詩、劇、たとえ、黙示なのか、また、著者は文字通りか、それとも比較的表現を用いているのかを見極める。
全般の構成・組み立て	考えの整理、節と節とのつながりに注意。 ときどき、著者がある主張をした後で、それをたとえて説明する。また、あるときは、考えの数々を述べた上で、普通の主張で要約する。

IV. あなたの観察力を増し加える方法

1. 訓戒を探す

著者が「何かをせよ」、「なにかをするな」、また、「何かになるように」と言っている部分に注意しなければならない。それらは、訓戒・警告・奨励・忠告・命令・約束といった類のものである。著者は、直接、あなた―読者―に語っているのである。

また、イエス・キリストの訓戒に関しては、彼は、彼の聴衆に直接語りかけるのである。訓戒を探すときに、命令の動詞、すなわち、あなたに何かをせよ、と言っていることに注意すべきである。

2. 論理的関係を探す

著者が命令・忠告・警告を与えるとき、そこには、よくその理由・目的・証明・結果などが述べられている。また、「原因と影響」の関係に注意すべきである。ときどき、その著者は警告を促し、そのときに、もしその警告が聞き入れられなければ起こる影響について教えている。もしくは、彼は状態を述べて、その状態についての理由を与えることもある。

連結語は、この論理的関係を見い出すためにカギとなることがある。このようなカギとなる重要な連結語を見い出すよう、自分自身を訓練しなければならない。

3. 対比・比較・たとえを探す

著者が、新しい考えをもたらそうとするとき、よく為されることは、読者にとってすでによく知られている何かと関連させることである。考えを明らかにするために、著者が用いる対比・比較・たとえなどに、特別に注意すべきである。比較は、同類のものを扱うのである。

文法において、直喩的・比喩的表現がある。直喩的なたとえとして「炎のような舌」、比喩的なたとえは「舌は炎である」「人生は旅である」。対比は、反対のことを集めたものである。私たちの心は、比較よりも対比をよく覚えることができる。

連結語の「しかし」が、対比にはしばしば紹介される。

4. 繰り返し、そして、考えにおける進行

読者を感動させ、そして、彼の考えを伝えるために、著者はよくことばや慣用句や、考えを繰り返している。これらは、カギとなることばを探しているときによく見い出される。

また、その物事の列記に、特に注意すべきである。著者が列記したことには理由があるはずである。列記に、また、考えの進行に何か特別の意味があるのかを、調べるべきである。

最初と最後の物事を比較し、そこに何らかの重大な違いがあるかを見る。

5. 文法的構造

私たちは、いくつかのキリスト教教理が、動詞の時制・名詞の単数形・前置詞（～にある *in*、～を通して *through*）によって、定められて来たことを決して忘れてはならない。

私たちは、文章の中のすべてのことばの文法的構造を調べる必要はない。しかし、次のようなものには、私たちは特に気を付けなければなりません。

名詞と代名詞、特に個人的代名詞

- ・動詞とその時制動詞は、しばしばその文章を理解するカギとなる。
- ・形容詞と副詞、それらが何を表現しているのかを見る。
- ・カギとなる前置詞（～の中に、～を通して、～によって、～の）のようなことばの意味を見る。
- ・重要な連結語、結果や理由や結論を表す連結語に注意する。（ほとんど、それゆえ、しかし、同様に、まだ、など）
- ・強調すること、著者の考えを強調したいとして用いている考えや節。（まことに、確かに、最後に、特に、終わりに、わたしはあなたに言いました、など）
- ・句と節、それらが何を述べているのかを見る。また、それらの、いくらかの節が「だれかが」「何処かで」「何時」「何を」「どうして」「どのように」のことばによって紹介されていることに注意する。

これらのことばは、みことばを観察するとき質問をして使うものである。

6. 質問を用いているところを探す

質問が用いられていることに、常に注意する。著者は考えを紹介するために質問を用いる。もしくは、読者の思考にチャレンジを与えるためである。または、結論で彼の考えを要約するために使う。

ときどき著者は、修辭的疑問と呼ばれるものを用いることもある。彼は、答えを求めているのではない。しかし、それを、ただ用いることによって読者の考えを励まし、チャレンジをするために用いる。

7. 全般の構造

構造は、しばしば著者の目的を表す。人が何かを書くとき、普通は確固たる目的をもっている。それゆえ、彼が用いることばについて、注意するだけでなく、彼の考えの整理の仕方についても注意する。

常に、みことばの節と、段落の関係に注意する。同じ考えに集中していると思えるみことばの節に注意する。また、著者が一般的な主張をし、たとえでもってそれを説明しているか？それとも、彼が考えをいくつか出し、そして、一般的な主張でもって要約しているかどうかを見る。

8. 文学的形式と状況を探す

文学的形式は、著者が彼のメッセージを表現するために用いる書き方のタイプである。著者が用いることのできる主要な形式は、聖書的文学のうちに見い出す。

みことばを学ぶときに、次の形式に注意するように。

- ・講演 : イエスの説教や、手紙の中に見い出されるアプローチの種類である。それは、考えが論理的に、そして、議論形式で紹介されている。

- ・単調な物語 : 歴史書や福音書に見られ歴史的出来事が時代順に描かれている。
- ・詩的 : 詩篇やヨブ記で見られる形式。
- ・たとえ : 特別な真理を導き出すために使われる短い物語。
- ・黙示 : 象徴や幻の記述によって特徴づけられている。黙示録やダニエル書。

V. 解釈の方法

1. 解釈の目的

あなたの目標は、著者の意味することは何かを見極めることである。解釈とは、そのみことばが私たちにとって何を意味するのかについて考えることです。

2. 観察と解釈の間の橋

- ・理解するために質問すること

ふつう、何かを読むとき、私たちは無意識に三つのことをする。

- (1) 文の中のことばを読む
- (2) そのことばが言っていることを観察する
- (3) 理解できないことばや、文についての疑問を私たち自身で尋ねる

- ・なぜ、質問するのか？

質問することの理由のいくつかは、次の三つである。

- (1) 私たちの思考を活気づけるため
- (2) ことばや文の意味について、私たち自身が真剣に考えるため
- (3) 解釈に必要なことば・句・文を見分けるため

質問することを学ぶことは、ちょうど、どのように観察するかを学ぶ技術と同じように見える。常に覚えておく一つのことは、あなた自身の理解のために、あなた自身が質問することである。

3. 解釈の過程

はじめに、みことばが本当に言っていることは何かを観察すること。それから、言われたことが何かを解釈することである。

ステップ1. 祈りと黙想

聖霊の導きによってのみ、あなたはみことばを正しく解釈することができ、真理を見出すことができる。祈りと黙想が解釈の第一の過程である。

ステップ2. 定義する

辞書は解釈の道具として大切なものの一つである。より深く知るために、ことばの語源を学ぶ。そのためにも、良い辞書が必要である。

常に自分自身に、著者はこのことばを使ったとき何を考えていたか、みことばのいかなる洞察が私にこの定義を与えたかを考える。

ステップ3. 比較する

別の訳を見る。違った訳を比較することは、常に助けになる。

ステップ4. 調査する

他のみことばの箇所から調べる。欄外やコンコルダンスを用いる。聖書自身による解釈を試みる。

ステップ5. 参考する

決して、みことばを現在の目を通して読んではいならない。歴史的・文化的・地理的な聖書時代の背景を知ることが大切である。

ステップ6. 取り組む

考え、黙想し、評価し、熟考して、みことばの意味を決定する。

ステップ7. 要約する

著者が言わんとしていることを要約する。

VI. 物語を学ぶ

これまで、様々な観察すべき特別な事柄について学んで来ましたが、みことばを観察する一特に物語を一方法が、他にもあります。それらは「だれが *who*」「どこで *where*」「いつ *when*」「何を *what*」「いかに *how*」「なぜ *why*」です。

1. 観察

・どこ (*where*)

物語の場所を見極める。そして、地図の上で見極めることが、非常に助けになる。

・いつ (*when*)

物語の時を見極める。しばしば時を見極めるために、みことばの他の箇所を学ぶ必要がある。

・だれ (*who*)

物語における人物を見極めること。それぞれがどのように描写されているか見極める。

・なに (*what*)

出来事、行動、また、会話の詳細と、正確な順序を見極める。しばしばその出来事や行動、会話を時間の経過に沿ってあげることは助けになるでしょう。

人物がどのように互いに対応しているかを見極める。

物語を創造的に、また、頭の中で描きながら読むことで、その場面を心の中で再現すること。あなたが読むとき、その人物が見、聞いた、感じたように、あなたも見、聞き、感じる。

・いかに (*how*)

どのように物語が終わっているかを見極める。出来事や、人物の行動が結末でどうなっているかを見極める。

どのように人物が行動し、そして、ふつうの人間としてどのように対応しているか見極める。彼らが互いにどのように対応しているか見極める。

- なぜ (why)

単なることばより多くのことを観察する。あなた自身、いくつかの質問を問いかけてみる。「なぜ、このように出来事が起こったのか?」「どうして、そのように人物が行動し、また、反応したのか?」、「彼らは異なった対応ができなかったのだろうか?」。

2. 物語へのアプローチ

よく私たちは、聖書の物語に表面的なアプローチをします。私たちは、その物語を何度も聞き、よく知っている。また、私たちは、物語が単なるメッセージであり、これらの聖書の人物が、歴史のある時期に住んでいて、本当の肉と血をもった人であることを忘れがちである。私たちが、物語に表面的なアプローチをするゆえに、私たちは、解決も、そして、適応も表面的なものになってしまっている。

六つのことばを用いる以外に、学びにおいて、これらのアプローチを考慮に入れてください。

- 現実的になる

聖書の物語を学ぶとき、その時代に戻ってみる必要がある。決して、私たちが今生きている時代の目で見えてはならない。聖書の時代には、福祉や冷蔵庫や女性解放運動は存在していなかったのである。このために、私たちは、その当時の法律や宗教的教え、また、習慣、その時代の行いなどを学ぶ必要がある。

- 想像的であれ

ほとんどの聖書の物語が、ただ、事実だけを述べている。あなたが物語を読むとき、あなたの想像のうちに、肉と血を与える必要がある。あなた自身、その出来事に参加しているものと思いなさい。それをあなたが実際に見、また、聞いているものと思いなさい。また、ことばやその聖書の人物の行動を見、聞きするだけでなく、彼らの声の調子や顔の表情、からだの反応も見るようにしなさい。

- 感情移入的であれ

すなわち、その人物、彼の問題や感情と同化することである。その人物になったつもりで、その人の苦しみ、痛み、関心、困難、喜びを考える。行動だけでなく、心の中を探ってみる。

付録 (3) みこころの見つけ方

どうすれば、神のみこころを知ることができるのか?

神はご自分のみこころを各キリスト者に示されます。しかし、そのためには、次の条件を満たしていなければなりません。

I. 救われている

1. 神はすべての人が悔い改めて、救われることを願っておられます (Ⅱペテロ 3 : 3 - 9、Iテモテ 2 : 3, 4)。それは、救われた者だけが神との交わりをもつことができるからです。神のみこころは、罪が赦され、神との交わりの中にいる者にだけ示されます。

II. 御霊に満たされる

1. 力が必要 使徒 1 : 8

- ・「力」というギリシャ語は「ドゥナミス」で、ここから「ダイナマイト」ということばが由来した。

(1) 私たち自身の力によってではなく、
私たちのうちに与えられている神の力に満たされるとき、素晴らしいわざを為す。

- ・その理由 : 不信仰の悪い時代だから エペ 5 : 16

(1) みことばを信じない。 II テモテ
4 : 3、4

(2) キリストの再臨を信じない。

II ペテロ 3 : 3、4

このような時代だからこそ、常に、キリスト者は「御霊に満たされる」ことが必要である。

例 : ペテロ

- ・イエスとともにいたとき

(1) 奇蹟的なことを行った マタイ 14 : 22 - 33

(2) 奇蹟的なことを語った マタイ 16 : 13 - 17

(3) 奇蹟的な励ましがあつた ヨハネ 18 : 10

- ・イエスとともにいなかったとき

(1) イエスを知らないと言つた マルコ 14 : 29 - 31 (71 - 72)

- ・イエスの昇天後 (イエスとともにいたときと同じ力が与えられた)

(1) 力強く主を証した 使徒 2 : 14

(2) 病人を癒した (奇蹟) 使徒 3 : 1 - 8

(3) 迫害にもひるむことがなかつた 使徒 4 : 1 - 20

2. 御霊に満たされるには?

◎自分自身を主のご支配に委ねる。

自分自身のすべてを神に明け渡し続けることです。すなわち、自分のしようとすることを、その考え、計画のすべてを常に主に委ね続けることです。そして、神が望まれていることを行うために、それを求め続けるのです。

- ・みことばを学ぶ。 コロサイ 3 : 16

「キリストのことばを豊かに住まわせ」とは、学びを通して、みことばを心に蓄えることです。そのみことばが、私たちの心を支配するなら、神のわざが私たちのうちに為されます。

* 「御霊に満たされた人生」を歩み続けるには、常に、イエス・キリストのご臨在を意識しながら、すべてのときを生きることである。

III. 聖くなる I テサロニケ 4 : 3 - 7

1. 性的な罪から離れる

私たちのからだをコントロールしようとする罪の誘惑から、自らを守ることが必要です。そのためには、まず、誘惑するものから離れて、近づかないことです。

2. すべてを神のためにする

罪から離れるだけでなく、いつもすべてのことを、ただ神の栄光を現すためにすることが必要です（Iコリント10：31）。私たちは、神を知っている者にふさわしく生きる、ということをおぼえてはなりません。

IV. 従順 I ペテロ 2：13－15

私たちキリスト者が、この社会の法律や制度に従うなら、それは社会に対するすばらしい証となると、みことばは教えます。みことばに反しないことなら、どんなことでも従うことが主に喜ばれることです。

V. 受難 ルカ 9：57，58

イエスに忠実に従うとき、そこには苦しみがつきものです（Iペテロ3：17、IIテモテ3：12）。ペテロも、主のために多くの苦しみを受けました（使徒4：3）。しかし、彼はその苦しみを喜んでいました。それは、それを通して、多くの人たちが救われたからです。彼は、苦しみは、神の与えてくださった機会だと信じていました（使徒4：29）。

結論

以上の五つのことに「はい」と答えることのできる人は、あなたの心に与えられた「願い」通りに行くことです。それは神が与えてくださったものです（詩篇37：4）。なぜなら、あなたは、自分の願いではなく、神のみこころだけを求め、すべてを委ね、神を畏れ、忠実に歩んでおられます。そのようなあなたの心の波長は、神のものと同調しています。だから、その心にある願いは、神のあなたに対するみこころなのです。

また、確信のない人は、牧師に相談することです。神のみこころならば、必ず、あなた以外の人にも、特に、教会の霊的リーダーにも示されていることでしょう。